

「わが道の光」

我孫子栄光教会 仁科宣雄



あなたのみ言葉はわが足の
のともしび、わが道の光で
す。
詩篇119・105

人は自分自身の励まし、心のよりどころとしてのことばを「座右の銘」として持っています。クリスチャンにとつて「座右の銘」のようにな心のよりどころとするものは、神のことば「みことば」です。教会学校では『みことば暗唱』をして、みことばが子どもたちの心に蓄えられて、人生の糧となることを願っています。関東教区ティーンズ・バイブルキャンプでは、テーマの「みことばをイラストと共にしおりに作って、キャンプ中に暗唱して担当の三名の先生のところ行って暗唱チェックをしてもらってみことばのしおりをゲットしています。キャンプもスタツプも毎年楽しみにしています。年毎にみことばと共に、メッセージがひとり一人の魂に留まることを願っています。

我孫子栄光教会では、毎月第三主日礼拝に先月の毎週のメッセージの中心聖句(4つ〜5つ)を暗唱する時を持っています。ご褒美は無いのですが、皆さんの内に神のことばがしっかりと留まるように願っています。

み言葉はわが足のともしび、暗い夜道を遠くまで指し照らす明るい光ではなく、一歩先、半歩先をほんのり照らす小さなともしびだと言っています。遠くを照らす灯台のサーチライトでは、近くを照らすことはできません。また遠くまで照らす必要ありません。ただ、小さな一歩を踏み出すその先を少し照らす光でいいのです。毎週の礼拝で聞く「みことば」がその人の心の中で支えとなり、力となることを信じて伝えていきましょう。私自身も、「わたし自身が一緒に行くであろう。そしてあなたに安息を与えるであろう。」(出エジプト33・14)、「これは権勢によらず、能力によらず、わたしの霊によるのである。」(ゼカリヤ4・6)に支えられ、奉仕させていただいています。子どもたちの成長の中で支えとなり、力となる「みことば」を伝え、ひとり、ひとりの内に神のことばが留まり続けるように祈っていきましょう。

牧羊者

目次

巻頭言	1
目次	2
カリキュラム	3
教師養成講座「日本宣教の歴史（I）」	4
年末年始△1/7▽	17
キリストの十字架への道△1/14▽3/25▽	23
牧羊ひろば（鈴蘭台福音教会）	89
「牧羊者」のご購読・ご利用について	92
おわりに	92

〔凡例〕

1. 原語について…ギリシャ語は〔ギ〕、ヘブル語は〔ヘ〕、アラム語は〔ア〕で表記しています。
2. 礼拝メッセージ例の最後の「さんび」の略記について
 こ…「こどもさんびか」、こ改…「こどもさんびか改訂版」（以上、日本キリスト教
 団出版局）、ホ…「教会学校・日曜学校 子どもさんびか」（日本ホーリネス教団出
 版局）、イン…「教会学校さんびか」（インマヌエル教会学校部）、ふ…「ふくいん子
 どもさんびか」、GS…「ふくいんこどもさんびか2 グローイング・ソング」（以
 上、日本児童福音伝道協会）、PW…「プレイズワールド」（リビングプレイズ）

神を信じる生涯

イザヤ 40・26

● 年末年始

行事

テーマ

聖書

暗唱聖句

1月7日 新年礼拝
キリストによる新創造
Ⅱコリント 5:13～19
同17節

● キリストの十字架への道

1月14日
ペテロの信仰告白
マタイ 16:13～20
同16節

21日
十字架を負うて
マタイ 16:21～26
同24節

28日
山上での変貌
マタイ 17:1～8
同5節

2月4日
幼な子のように
マタイ 18:1～5
同3節

11日
富める青年の悲しみ
マタイ 19:16～26
同26節

18日
仕える生き方
マタイ 20:20～28
同28節

3月4日
エルサレム入城
マタイ 21:1～11
同9節

25日
一番大切な戒め
マタイ 22:34～40
同37節

11日
契約の血
マタイ 26:26～29
同28節

18日
ゲッセマネの祈り
マタイ 26:36～46
同39節

25日
棕櫚の日
十字架上のイエス
マタイ 27:45～56
同46節

日本宣教の歴史（Ⅰ）

関西聖書神学校舎監 川原崎 晃



はじめに

かつて西ドイツのヴァイツゼッカー大統領は、「過去に目を閉じる者は現在にも盲目である」と言いましたが、今日教会を取り巻く様々の課題・問題を自覚しないのは、結局は過去に対して盲目であるからだと言えないでしょうか。また、信仰の在り方が、自分の幸福とか自己実現の手段としてとらえ、自らと教会が歴史の担い手であることの自覚に欠けているからではないでしょうか。

一時、歴史を無視し、ただ聖書と自分の信仰に逃避する傾向があった「福音派」が、具体的な歴史の中で生き、そこで主を証しし、主に仕えつつ教会を建て上げること

の必要を痛感するようになりました。と言うのも、私たちはキリスト教二千年の歴史のある場所に位置づけられているのであって、その歴史的遺産を無視すれば、たとい一生懸命やつても、すでに誰かがやっていたことを、単に繰り返しただけに過ぎないことになってしまいました。いつの時代でも、教会は多くの課題・問題に直面し、それと取り組み、異端と戦ってきました。もしそれを無視したら、先祖たちが残していった尊い遺産を受け継がなかったために同じ失敗を繰り返し、前者の轍を踏むことになるでしょう。だからこそ、歴史の目をもって見たとき、私たちはどこへ向かっているのかを知る手がかりとなります。信仰の歴史的遺産に立脚しなければ、将来に対する創造的な営みが生まれてこないのです。

I 日本宣教の歴史を学ぶにあたって

日本におけるキリスト教史、特に福音宣教の歴史を振り返るとき、福音書に記された種蒔きの譬えを思い起こします（マルコ4・1〜20）。この日本という地に蒔かれた種は、どうであったのでしょうか。時には道ばたであったり、土の薄い石地と思えたり、茨としか見えなかったりでしたが、究極的には主の憐れみの中にあって、良き地であったと確信しています。いつの時代も、蒔かれる福音の種が悪かったわけではありません。あえて課題があるとすれば、心を閉ざしてしまうといった土壌に問題があったり、宣教の主体である蒔く者の資質や、蒔き方に課題があったりしました。

その一例として、柳田友信師は、以下のように指摘しておられます。概説しますと、「日本の福音宣教史において、キリスト教ブームとも呼ぶべき時期が、過去3回あった。一つ目は、安土桃山時代の頃で、ローマ・カトリックによる宣教である。二つ目は、明治中期の欧化主義全盛のいわゆる鹿鳴館時代である。三つ目は、太平洋

戦争終戦後の進駐軍時代である。これらの時代はいずれも、日本の歴史の中で、かつてない外への解放の時代であった（大きな社会変化があり、文化的にも著しい価値転換の起こった時期）。そうした歴史の流れの中で、キリスト教が欧米の文化と共に勢いよく入ってきた。そして、それらの時期の後に厳しい反動の時代があった点で共通している。一つ目には積極的な弾圧によって根絶状態になり、二つ目には反動的な国家主義によって、緩やかなる弾圧が加えられた。しかし、三つ目には、直接に展開を妨げる原因もなく（この挑戦に対して民族的応答が今なおなされていないと見ることもできる）、一過性のブームに終わったようである。これらの三つの時期の現象は、教会が主体的に宣教に励んだ結果ではなく、外発的なものであったことが原因のように考えられる」との見解です。

なお、日本カトリック史を専門とされる海老沢有道師は、「今日まで、日本の宣教において実りが少なかった一つの理由として、日本の教会が、日本のキリスト教の歴史を謙虚に学んでこなかったからではないか」と指摘しておられます。そうした意味からも、教会教育に携わる

者が、広い視点から、日本宣教の歴史を学ぶ意義があるのではないでしょうか。今回は、「ローマ・カトリックによる宣教」（二五四九年以後）、次回は「プロテスタント教会による宣教」（一八五九年以後）を取り上げます。

Ⅱ ローマ・カトリックによる宣教

今日にまで及ぶ本格的なキリスト教宣教の開始は、一五四九年のローマ・カトリック教会に属するイエズス会士フランシスコ・ザビエルの鹿児島上陸に求められます。

1. イエズス会の性格

東洋の島国にまで福音を伝えたイエズス会は、イグナティウス・ロヨラがザビエルら六人の同志と共に、一五四〇年に設立した男子修道会です。この団体は、従来の清貧や瞑想を重んじる中世的修道会と違い、教皇に絶対服従を誓い、宣教のためならば地の果てまでも赴くことを目指した、戦鬨的修道会でした。設立の歴史的な背景を見るならば、プロテスタント宗教改革に対抗し、失地

回復を目指すローマ・カトリック教会の対抗改革の中の最も強力な運動といえます。この修道会のモットーは、「すべては、より大いなる神の栄光のために」というものであり、一切の無神論的、非カトリック的なものと戦い、世界とその文化をローマ・カトリック化することを目指しました。

その海外宣教における原動力となった聖句は、「たとい人が全世界をもうけても、自分の命を損したら、なんの得になるうか。」（マタイ16・26）と、「全世界に出て行って、すべての造られたものに福音を宣べ伝えよ」（マルコ16・15）でした。そして、海外宣教のやり方は、その対象によって大きな差異が見られました。相手が自分たちよりも文化的に低いと思われる場合には、非常に強圧的に接しています。特にメキシコのアステカ文明やペルーのインカ帝国を徹底的に破壊したように、宣教地をカトリック化していきました。今日においても中南米諸国やフィリピンがカトリック国であるのは、おもにイエズス会の実です。それに対して、中国や日本のように高度な文化を持っていると考えられる場合には、現地の文化や習俗を最大限に尊重し、非常に融和的な方策を

とっています。際立った方針としては、セミナリヨ（神学教育）とコレジオ（セミナリヨの準備教育と一般教育を兼ねたもの）と呼ばれる学校を建て、青少年への教育を重視しました。日本においては、この団体の持つ良い面が発揮されたと言えます。

2. ザビエルの来日とその宣教活動

インドで宣教の壁にぶつかっていたザビエルが、一五四七年にマラッカで日本人ヤジロウと出会い、その知性に深い感銘を受けました。併せて、「日本人が福音を聞いてすぐにキリシタンになることはないだろうが、彼らの発する多くの質問に満足な答えを与え、ザビエルの言動に非難されるところがなければ、指導者も民衆もキリシタンの信仰を受け入れるであろう」と聞かされました。そして、貴族や仏教僧侶に関しては失望するものの、一般民衆に対して非常な理解と好意を示し、その優れた知性、礼儀正しさ、善良さをたたえつつも、日本人が持つ名誉心や自尊心についても鋭い観察をしています。概して、日本人に対する眼差しは、深い愛と大きな期待に満

ちていました。

こうした人間理解に基づいて、2年余の日本滞在期間中、山口の大内領や九州豊後の大友領で宣教活動を行いました。その後ザビエルは、日本の文化や思想に及ぼしている中国文化の影響の甚大さを痛感して、中国の宣教を志しています。ともあれ、彼の宣教方針は、彼の後継の宣教師たちによって、そのまま受け継がれ、推進されていきました。その意味では、彼によって日本宣教の土台が据えられたと言えます。

3. ザビエル以後の日本宣教

一五五二年、ザビエルが日本を去った後、10年程の間は宣教が停滞したままでしたが、その後急速に宣教は進展し、九州・中国・関西を中心に、多くの回心者が起こされました。その理由としては、有力なキリシタン大名が起こされ、宣教を支援、保護したこと、織田信長や豊臣秀吉らがキリスト教を保護したことによります（それは貿易による利を収めることや仏教を制圧するために利用することを図ったものでした）。そして、ザビエル

の後を継いだドルレスやオルガンティノーら指導者が、日本人の感情や風習を最大限尊重し、それに適応するという宣教方策で力がありました。たとえば、オルガンティノーは、「可能な限り、万事において日本人に順応するように試みることである」との確信に立って、土着的宣教を進め、京都地方のリバイバルの要因ともなりました。そこには、「福音のために、わたしはどんな事でもする。わたしも共に福音にあずかるためである」（Ⅰコリント9・19〜23）との、宣教のゆえの愛の同化が見られます。しかし、一五七〇年に日本全体の宣教の責任者として、フランシス・カブラルが就任して以来、次第に日本での宣教は大きな壁にぶつかり、混乱していききました。それは彼が持っていた日本人観が先の人たちとは異なり、日本人は文化的にも政治的にも低級と理解したため、高圧的な態度に出たからでした。そのため彼の宣教方針に対して、日本人修道士や信徒は彼を嫌悪した事は明らかで、彼は日本の教会の前途を悲観的に見たのでした。

4. ヴァリニャーノの改革

先の事態は、カブラルとオルガンティノーの激しい対立、イエズス会士と日本人信徒との冷やかな関係を生み、不満と誤解と対立を教会内に起こしました。このような時に、天の御使いの如くに思われた巡察師ヴァリニャーノが日本に派遣されてきたのです（一五七九年）。彼は、一年間辛抱強く日本人の国民性、風習、日本の教会事情を観察し、種々の情報を集め、解決策を探りました。

彼のイエズス会総会長への報告書『日本巡察記』は、ザビエルの日本人観を受け継ぎ、オルガンティノーの立場を支持しています。基本的に日本人を見る眼差しは好意と信頼に満ち、その視点の下に日本宣教の改革を打ち出しました。すなわち、セミナリオとコレジオを設置して、日本人修道士を養成して重用しました。「ヴァリニャーノほど正当に、当時の日本を理解し、政治から文化・風習に至るあらゆる分野にわたって学問的分析を加え、それに対処し、それとの融合点を見出し、多くの困難にもかかわらず、見事な成果を収めた人物は、他に見当た

らないと言つてよい」(海老沢有道)と言われる所以^{ゆえん}です。こうして、日本のキリスト教宣教は崩壊の危機を脱し、更なる前進を遂げていきました。

5. 織田・豊臣政権とキリスト教

この時期のキリスト教の飛躍的な成長に関しては、教会側の熱心な努力もさることながら、織田信長・豊臣秀吉という二代にわたる権力者の庇護^{ひご}があつたことも要因の一つです。一五八〇年頃には、日本の総人口約二千五百万人のうち約35万人のキリシタン人口があつたとされています。

彼らによつて日本の中央集権体制が確立していく中で、教会がこれらの権力者たちとどのような関わりを待ったのかを知ることにより、国家と宗教の問題や、日本的なるものとキリスト教的なるものとの対立の問題を考える素材が与えられます。先に述べたように、いかなる宗教でも、天下統一の野望に役立つ限りは最大限に利用しようというものであり、キリスト教も利用価値のある間は、大いに保護され、奨励されました。それに対し

て、カブラル後の日本の教会の最高指導者であつたコエリヨ準管区長らポルトガル系イエズス会士たちは、権力者におもねる形で活動をしたことにより、教会は極めて不安定な状況にさらされ、宣教の危険性をはらむこととなりました。この様な成り行きに対して大いに懸念したのは、オルガンティーノや高山右近たちで、ヴァリニャーノ自身も政治不介入の原則を主張していました。

一五八七年、キリシタン国が日本侵略を計画しているとの疑念を抱いた豊臣秀吉は、それまでの方針を突如として変更して、伴天連^{ばてんれん}追放令を発しました。秀吉時代に見られるように、権力者は国家を統一し、その権力の絶頂を極めていくとき、自らを神の如き存在として絶対視させ、その権威や支配を侵す存在を拒否する傾向があります。日本の歴代の権力者も同様で、権力者個人や国家権力を神の如きものとして打ち出していくと、それは唯一の創造主なる神への信仰を貫くキリスト教と根本的に相容れないものとなります。福音のためには何でもすると言いますが、政治権力におもねることには警戒を要します。

6. キリシタン大名の出現

イエズス会が日本に宣教を始めた頃は戦国時代の末期、まだまだ地方分権の時代で、それぞれの大名はその領地においては絶対君主的存在でした。そうした中でイエズス会士たちは、積極的に大名に接近し布教しました。先のカブラルは、「大名は封建君主として自由に住民を信仰に入らせたり、あるいは棄教ききょうさせることができ、従って日本では封建君主に優る宣教師はいない」と考えたほどでした。このようなイエズス会側の布教方針に南蛮貿易の利害が加わり、さらに信長・秀吉がキリスト教を保護したことも相まって、一五六〇年代から八〇年代にかけて続々とキリシタン大名が起こされました。それらの中には真剣に求道して入信し、禁制後の迫害の中でも信仰を全うした者もあれば、南蛮貿易の利から入信し、後に信仰を棄てた者も少なからず見られました。確かに、長崎の大村純忠や大分豊後の大友宗麟その他においてそれが全く無関係とはいえません。ただし、「一般によく言われるように南蛮貿易の利益に心をひかれた西国大名が入信し、その圧力で領民が入信したというような

単純に片付けられるものではない」(海老沢有道)とも評価されています。なお、高山右近のように、貿易とは全く無関係で入信し、しかも信仰を全うした存在を見落とせません。

高山右近について、彼の信仰の足跡に触れておきます。高槻城主時代には、領民約2万5千人のうち約1万8千人がキリシタンとなり、更に後には、ほぼ全領民がキリシタンになったとも言われています。彼の感化力によって、小西行長、蒲生氏郷らの有力キリシタン大名や細川ガラシャ夫人らの高山の宗門が生み出されました。秀吉の下では明石城主となりましたが、秀吉の伴天連追放令により、領地没収・追放という迫害を受けても信仰のゆえに、十字架の道を選びました。フロイスの『日本史』によれば、「キリシタンをやめることに關しては、たとえ全世界を与えられても致さぬし、自分の救済と引き換えることはしない。よって私の身柄、封禄、領地については、殿が気に召すように取り計らわれない」と秀吉に申し伝えたとあります。まさにこの言葉は、イエズス会のモットーに基づくものです(マタイ16・26)。その後、彼は前田利家の客となり、金沢の地でもなお伝道をやめず、

徳川家康の禁制令により、国外追放となり、マニラに移り、そこで召天しています。

アジアのキリスト教の歴史の中で、日本における宣教には特異性があると指摘されています。それは、他の国々ではキリスト教に村ごととか部族ごと更には民族ごとに関心する例、すなわち集団関心が非常に多く見られます。ところが日本においては、キリスト教への関心は個人レベルかせいぜい家族、親類縁者のレベル位までで、一村ごと関心という例はまず見られません。特にこの傾向はプロテスタント宣教において顕著です。そう考えるとき、キリシタン大名を通してその領民が集団関心するという出来事は、日本における福音宣教史上、極めて注目すべきことであると言えます。

7. 徳川政権とキリスト教

一五八七年の伴天連追放令の結果、外国人伴天連の国外退去、キリシタン大名の代表的存在であった高山右近の領地没収と追放、京坂・長崎教会堂の破壊等が行われました。しかし、イエズス会士たちが極力活動を自粛し、

ヴァリニャーノの再来日による外交的手腕により布教活動が事実上黙認されたこともあって、被害は軽微にとどまりました。そして、一五九七年の長崎二六聖人の殉教等の迫害があったものの、宣教は大いに前進をとげました。キリシタン人口は、一六〇〇年頃には約六〇万人を数えたと言われています。

さて、当初家康のとった政策は、キリシタン黙認政策ともいべきものでした。特に、通商上の理由から、従来独占的な地位を占めていたポルトガル系イエズス会よりも、スペイン系フランシスコ会に好意を寄せました。しかし基本的に家康は、キリスト教を自己の日本支配と相容れないものと考え、徳川幕府の支配が確立していく中で、キリシタン禁制の方向を明確にしていきました。その頂点となったのが、一六一四年の伴天連禁令です。この禁令を簡単にまとめると、以下ようになります。「古来より日本は神国であり、仁義を重んじる国である。しかるに伴天連国より導入されたキリシタンの教えは、神仏信仰や人倫を破壊し、日本の政治や法律に反する侵略的な邪宗門である。キリシタンがその信仰のゆえに刑罰を受けることを喜んでいる姿は、その教えが邪法に外

ならず、神仏の敵であり、直ちに禁止しなければ必ずや日本国の災いとなる」と決めつけています。

ここで注意しておきたいことは、キリシタン禁制が決して秀吉や家康という特定の個人の政策であるとは見ることができないということです。キリスト教の教えと日本の封建倫理は、以下のようなものとも相容れないものを多く持っていました。

① キリスト教の唯一神の前における平等の思想は、君臣・親子の間の忠孝の道を否定するものと考えられました。「すべての人は、上に立つ權威に従うべきである」(ローマ13・1)と、聖書は主人に対し服従を説いています。高山右近に見られるように、唯一神への信仰は主君といえども犯し得ないものがあつたからです。

② 日本の封建倫理と相容れないと考えられたものに、自殺の禁止と一夫一婦制があり、その倫理観において正面から衝突しました。日本の武士道は切腹をその精華とし、権力者が側室をかかえ、妻や娘を人質にすることが公然と認められたからです。

③ しかし最大の問題点は、権力者の間にある、日本

神国思想でした。歴代の権力者たちは、日本を支配し続けるためには、政権のみならず教権すなわち宗教的權威をも一手に握ることの必要性を知っていました。そうした中で、この神国思想と全く異質なものであるキリシタンを禁じるという思想統制を断行することによって、自己の權威づけをはかったのです。

こうした日本の神国思想を背景とする支配の論理は、徳川時代のみならず太平洋戦争前までも貫かれ、キリスト教との相克が繰り返されました。概して、キリスト教の宣教が困難になるときは、国家主義的傾向が強まり、民族意識・愛国心の高揚が叫ばれるときです。

8. 禁教下のキリスト教

伴天連禁令以後、いわばキリシタンにとっては地下活動の時代が始まりました。宣教師たちは殉教覚悟で潜伏して活動を続け、日本各地に分散する信徒たちを訪ね、信仰の指導をしました。西日本に多かったキリシタンたちは、迫害を避けて、好意的な奥羽地方・津軽地方・佐渡・北海道松前地方に逃れて、信仰活動を続けました。

これらを見ると、「使徒行伝8章」に記されているエルサレム教会への迫害が各地に福音の種を蒔き散らしたように、禁制がかえって福音を全国に拡散させるものとなりました。しかし、徳川政権下でのキリシタン禁制と貿易統制が本格化していく中で、特に一六二二年には一挙に55人の宣教師や信徒が火刑となった元和の大殉教が起きました。その殉教は、キリシタンにとっては「天国への直路」にほかならず、彼らの信仰を聖別する神の試みであるとの堅固な信仰によって、彼らは支えられました。

そのために、徳川幕府は以下のような徹底的なキリシタン禁制策を打ち出しました。それらは、今日に至るまで日本人の国民性に影響を与えているもので、見逃すことはできません。

① 宗門改。士農工商を問わずにすべての国民が、毎年定期的に各自の所属する宗門を檀那寺だんなでらの証明を添えて提出させ、帳簿に登録させることによって、キリスト教入信を防止しました。

② 寺請制度。当初はキリシタンから改宗して仏教徒に戻った者が、寺の檀家となったという請け合いの証印をとりました。後に幕府は全ての人が帰属する檀那寺

で、キリシタンでないことを証明する証文を受けることを強要しました。

③ 踏絵。キリストやマリヤの聖画像を踏ませ、拒否すれば拷問にかけ、改宗を強いました。

④ 五人組の連座制。相互監視制度で、組の中からキリシタンが出れば、他の者も同罪として連帯責任を負わせました。

⑤ キリシタン類族改。その家系を五代にまで渡りキリシタン類族として厳しい監視下に置きました。

⑥ 宗門改役の設置。一万石以上の大名には、選任のキリシタン取締役が設置されました。

⑦ 訴人奨励のための報奨制。キリシタン発見のため、密告者に多額の賞金を与えました。

⑧ 鎖国の完成。一六三九年以後、全ての日本人の出入国の禁止、キリスト教の禁止、貿易の取り締まり等の禁制策が完成されました。

このような大規模な迫害の結果、殉教・棄改・改宗が相次ぎ、キリシタン勢力は急速に衰え、以後潜伏キリシタンの時代が幕末まで続きました。

このようなキリシタン禁制策が、日本人の国民性にど

のような影響を与えたでしょうか。日本に伝わることわざの中には、「長いものには巻かれる」、「寄らば大樹の蔭」といった、上に対しては従順に、そして自己主張を戒め、大勢に従うことを求めるものが多いようです。つまり日本の社会で処世していく術として、自分が確信するものを貫いていくというよりも、絶えず回りを気にし、大勢からはみ出さないことが大事なことでとされます。

こうした矮小^{わいしょう}で、本音と建前を巧みに使い分けながら、大勢につく国民性は、徳川270年の治世の中で、五人組などの上からの統制と相互監視と長い鎖国の中で身についたものが多いといえましょう。そうした国民性が、キリシタン禁制の諸政策と結びつくものであることを思うと、福音宣教はまさに日本人のメンタリティーそのもののへの挑戦です。こうした課題は、今日の日本の教会が直面する大きな課題でもあります。キリスト者は1パーセントの少数者であり、なお日本社会に異質なものと見られがちですが、福音を根づかせていくためには、息の長い宣教の努力と祈りが必要です。

9. 潜伏下のキリスト教

潜伏中のキリシタンにとっては、如何に他に知られずに自らの信仰を守るかということが全てであり、伝道などはまず不可能な状態でした。そうした中で彼らはあらゆる労苦を忍んで生活し、信教の自由の日が再び訪れるのをひたすら待ち続けたのでした。

潜伏時代には、キリシタンたちは表面的には徳川幕府に従順にしていました。寺請制度により各自は檀那寺を持ち、葬式には仏僧に来てもらい、その去った後に自分たちだけで密かに葬式をやり直し、棺の内には木の十字架を納めるなどしました。また九州地方のキリシタンたちは、年中行事となっていた踏絵には出て、そして踏絵を踏み、家に帰って、コンチリサン（告悔）のためにオラショ（祈り）を唱えたのでした。信徒間には、コンフラリヤと呼ばれる組織があり、触役や水役などの多少の役割分担がなされており、聖日や祝日を知らせ、集会を指導し、洗礼を施したりしました。とにかく信仰に関する一切のことを、彼らは仲間だけで秘密に行いました。指導する司祭もおらず、聖書その他の手引き書もない信

徒たちにとっては、オラシヨが神を頼む唯一の支えとなり、その保存が信仰上の大要点となりました。オラシヨには、主の祈りや使徒信条と十戒も含まれており、信徒たちは口から口へと伝え、またそれを密かに書き写すなどして、親が子に伝えていきました。また、降誕祭には、オラシヨを唱え、馳走をふるまいました。復活祭には、その前の受難週の断食などを厳密に守りました。

とにかく200年近くの潜伏生活の中で、信徒たちが最も苦心したのは、自分たちの秘密を他に漏らさないということでした。それ故彼らは、自分たちがキリシタンであることが発見された場合には厳罰も辞さず、殉教の覚悟をすべきことを、いつも子どもたちに教え込んでいたのでした。

ところで、潜伏キリシタンたちが徹底した弾圧下で信仰の偽装のために神仏信仰や習俗を取り入れていく中で、次第に神道や仏教との習合を免れなくなっていました。この習合は、もともと日本人の精神風土の中に濃厚に見られるシンクレティズム(宗教混交)的性格に加えて、イエズス会が採った融和的な宣教方策とも深く関わっています。「ただ聖書のみ」「ただ信仰のみ」を強調

するプロテスタンティズムに比べると、呪文じゅもんに結びつきやすい伝統的祈り、聖母子像やロザリオ、守護天使や聖人の加護等が大きな要素をしめるカトリック信仰は、はるかに日本の神仏と習合しやすい面を持っていました。加えて、もともと教理的に不十分な多くの信徒は、潜伏のための偽装を必要としたときに、大してそのことに困難を感じずに神仏的偽装をなしたといわれます。すなわち、マリヤとイエスの聖母子像を、慈母観音や子安観音に容易に置き換えることができたのでした。

そうした中で、キリシタンの組織が弱いところでは、神仏との習合は、信仰の埋没・自滅を意味しましたが、組織が強固な九州地方では表に出て来ない秘密集団として幕末の再布教のときまで持ちこたえることができたのでした。

10. キリシタンの復活

江戸時代後半の一七九〇年代、九州五島のキリシタンたちはあらゆる迫害に耐えながら、無人島に移り住むなどして信仰を守り通しました。当時の無学な農民たち

が、信仰の自由を求めて移住し、「七代たてば良か世になる」と信じてあらゆる犠牲を忍び、ついに信仰の自由を得る日を迎えたことは、日本の宣教史上極めて注目すべきことです。

ところで、一八五三年以後の開港により、外国人居留地内における宗教の自由が保障されるようになりましたが、復興期のカトリックの日本宣教を担ったのは、フランスの宣教師たちでした。一八六五年に、祭司プティジャンを中心に大浦天主堂が建立されるや、潜伏していたキリシタンの末裔たちと劇的な出会いをしました。しかし長崎奉行は、その年に浦上信徒の一斉検挙に踏み切りました。いわゆる「浦上四番崩れ」の始まりです。幕府崩壊後の明治政府も、キリスト教に対しては禁令の方針を変えず、浦上信徒に対しても厳しい弾圧で臨みました。政府は彼らを、九州をはじめとして日本各地の藩に流罪とし、各藩は虐待と拷問をもって信徒たちの改宗を強要しました。しかし、多くの者がそうした中で信仰を守り通しました。次回に詳細を語りますが、こうした中で世界各国の抗議と圧力を受けた明治政府はこれ以上キリスト教禁制策を続けていくことは難しいと悟り、遂に

一八七三年（明治六年）キリシタン禁制の高札を撤去し、次いで浦上信徒の釈放を宣言しました。この後、数万名がローマ・カトリックに復帰し、復帰しなかった者たちは、「はなれ」と言われて、今なお独自の信仰生活を守り続けています。

以上、ローマ・カトリックによる宣教を概観しましたが、日本人がどのようにキリスト教を受け入れ、保持し、戦い、また挫折したかを知ることができます。こうした課題に関しては、プロテスタント教会による宣教においても考察していく必要があります。

○参考文献

柳田友信著『日本基督教史』
海老沢有道・大内三郎著『日本キリスト教史』
海老沢有道著『日本キリシタン史』

〔「牧羊者・二〇〇七年度Ⅲ巻」より再掲〕

聖書 IIコリント5・13～19 テーマ キリストによる新創造

序論

(鎌野善三)

今週は、新年にふさわしく、「新創造」がテーマとされている。パウロはコリントに住む信徒たちに、キリストを救い主として信じた者はどのような生活をすべきかを教える手紙を書いた。その根本原則が、今日のテキストに示されている〈新しく造られた者〉(原語では、「新しい創造」としての自覚をもつことである。「新しい」という意味のギリシャ語には二つあるが、「カイネー」という語は質的な新しさを強調している(研究資料参照)。キリストを信じるとき、過去とは全く違った性質が私たちの内に造られ、新しい人となり、その生活が変化するのである。新しい人とは、次のような人と言えるだろう。

一、キリストの愛が迫っている人

パウロは、「おまえは気が狂っている」と言われたことがあった(使徒26・24)。確かに彼の生涯を見れば、普通の人がそう思っても仕方がない。ユダヤ人としての優れ

た血筋に生まれ、将来を約束されたバリサイ派の律法学者であつたのに、それらをみな捨てて、当時「異端」と見なされていた新興宗教に身を投げ打ち、必死になって「キリストこそ神の子、救い主」と宣教して回っていたのだから。彼の根底にあつたのは〈キリストの愛〉だった。キリスト信者にひどい仕打ちをしていた自分を、キリストは決して罰することをなさらず、逆に使徒としての重要な働きを委ねてくださった。この〈キリストの愛が：強く迫っている〉ゆえに、パウロはもはや過去と同じ生活はできなくなった。キリストの愛に應える新しい生活が始まったのである。

現代の私たちも、キリストが自分を愛してくださっているという強い自覚があるとき、その生活は変わっていく。その愛に応答していこうとするからである。自分の行動の一つ一つに対し、「愛が動機か、欲が動機か」と自問自答してみよう。

二、古い自分に死んだ人

キリストは、〈すべての人のために死んだ〉ということ、パウロの(そして、すべてのクリスチャンの)確信

である。だが、さらにパウロは続ける。キリストが全人類の罪に対する神の罰をすべて引き受け、十字架で死んでくださったからこそ、すべての人は死んだ（つまり、自己中心的に生きてきた古い自分は死んだ）。そして、これからは、キリストのために生きるようになるのだと。このことが、（かつてはキリストを肉によって（新改訳では「人間的な標準で」）知っていた）パウロに大きな生き方の転換をもたらしたのである。

私たちも「肉によって」キリストを知っている段階、言い換えれば、頭だけでキリストを救い主として理解する段階にとどまっていられないだろうか。それでは、自分の利益のために生きることしかできない。そういう自分が死なない限り、新しい生活を始めることは不可能である。十分間祈るよりも一時間テレビを見ることを好むことは、キリストの愛を知っている者に相応^{ふさわ}しいだろうか。

三、新しい自分となった人

過去の自分に死んでこそ、新しい自分となることができる。それが〈新しく造られた者〉である。自分を中心に考える「肉の子」だった者が死んで、神の愛を第一に

考える「神の子」としてよみがえることが、聖書の言う「新創造」である。新創造された者は、神と和解するだけではない。さらにこの〈和解の福音〉を人々に伝える者とされる。その実例がパウロであり、彼はこの福音を地中海沿岸に住む人々に命がけで宣教したのである。

新創造された現代の私たちも、もはや神から罰されることはない。決して「ばちあたり」にはならず、日々神から愛されて生きる「新しい自分」となる。このような人は、神の愛を常に喜び、神との交わりである祈りを絶やさない。またすべてのことを感謝して生きるようになる（1テサロニケ5・16～18）。そういう人こそ、争いの多いこの社会の中で、「平和をつくり出す人」^{ピースメーカー}（マタイ5・9）となることを銘記しよう。

結論

キリストは、私たちのために十字架で死んでくださった。私たちも、このキリストと共に十字架につけられたと確信しよう。そして、新しいこの年を、「新しい自分」となって生きていきたい。神と人とを愛して生きていきたい。

研究資料

(井上義実)

テキスト

13 気が狂っているのなら 気が狂(う) (ギ)エクセス
 テーメン) パウロの福音にかける熱心さ、情熱は多大なものであった。世の人から見るならば、常軌を逸したものに感じられた。イエス自身も気が狂った(マルコ3・21)と家族からも思われた。気が狂って見えたとしても、その動因は一般的な狂気とは全く異なる。世の人は、パウロに対して「狂気だ」、また「正気だ」と評するが、目的は神のためであり、教会の群れのためである。どちらにしてもパウロには、利己主義は全く見られない。

14 キリストの愛がわたしたちに強く迫っている パウロは神のため、また他者のために気が狂わんばかりに熱心である。その動機は十字架に命を捨ててくださったイエスの愛である。強く迫っている (ギ)スネフォー) 駆り立てる、強いという強い意味がある。閉じ込める、制限するという意味もある。パウロはキリストの愛に駆り立てられ、キリストの愛に囲まれている。ひとりの人がすべての人のために死んだ イエスの十字架の死は全

人類のためであったことが記されている。すべての人が死んだ イエスの十字架の死は、罪に死ぬべきすべての人の死を充足させるものであった。イエスの死がすべての人の霊的な死の代償となった。

15 死んでよみがえったかたのために、生きる 14節でイエスの十字架の死は、全人類の罪の代償であったということが示された。パウロはさらに進んで、イエスの十字架によって罪赦ゆるされた者は、イエスの愛に応えて生きる者であることを語る。死から命に移されることは、さらに発展的にローマ6・11〜14、ガラテヤ2・19〜20に語られている。罪に死に、義に生きる信仰者は、義認から聖化へと導かれるのである。

16 かつてはキリストを肉によって知っていた パウロは肉と霊を相反するものとして、反語的に用いている。肉とは神に属せず、人間や世が持つ性質である。パウロはかつてキリストを肉によって知っていたという。イエスと出会う以前、迫害者サウロの時代に、イエスをユダヤ人の規準で見ていたことである。多くのユダヤ人のようにイエスを律法に反する異端者として考えていた。今はもうそのような知り方をすまい パウロはダマ

スコ途上で神からの光に照らされ、イエスの声を聞いた。イエスの真実に目覚め、イエスの十字架の贖い、復活の栄光を知った。回心以来、イエスについての知識は、全く変換したのである。

17 **だれでもキリストにある ある**(ギ)エン 「の内に」という前置詞で、パウロが好んで用いる表現である。「キリストの内にある」とは以下の三つに要約されよう。
 ①律法の下にある(ローマ6・14)とは反対の意味である。
 ②イエスの十字架の贖いによって救われ、個人の関係においてイエスと一つにされている。
 ③救いに与った者たちの共同体の内に一つとされている。誰でもイエスを救い主と信じ、告白するならば神との新しい関係が築かれる。**新しく**(ギ)カイネー) ギリシャ語でネオオスも新しいという意味で、そこらは時間的な新しさを指すのに対し、カイネーは性質的な新さを意味する。**造られた**(ギ)クティシス) 創造するという意味がある。イエスの救いに与ることは、魂に新創造の業がなされることである。**古い**(ギ)アルカイオス) はじめからという意味で、通常使われるパライオスよりも始原的な含みがある。アダム以来の肉なる性質をも指している。イエスの

救いによってすべては新しくされる。**過ぎ去った**(ギ)パレルチヨマイ) 不定過去形が用いられており、単に「過ぎた」というよりも、「完了した」と訳すべきである。

18 **和解させ**(ギ)カタラツソウ) この世の和解は、被害、加害の両者の歩み寄りによってなされる。神と人との和解は、本節に「神から出ている」とあるように、神からの一方的な和解の呼びかけである。その結果、神との間に平和が生まれ(ローマ5・1)、神との間に交わりが生まれた。**和解の務をわたしたちに授けて下さった**イエスの十字架の贖いによって私たちは救いに与る。私たちのうちに新創造の業がなされる。神との関係に和解が生まれ、平和が与えられる。さらに、和解の務めを受けて、和解の使者とされるのである。

19 **和解の福音をゆだねられた福音**(ギ)ロゴス) 福音と訳されているが、ロゴスなので言葉である。口語訳聖書でロゴスを福音と訳出したのは本箇所のみである。「和解の言葉である福音、福音の本質であるイエス」を伝える。主によって新しくされた者は、この働きを使命として与えられている。

参考図書 Philip E. Hughes (NICNT, Erdmans) 他

聖書

Ⅱコリント5・13～19

タイトル

新しく造り変えられる

暗唱聖句

だれでもキリストにあるならば、その人は新しく造られた者である。

Ⅱコリント5・17

目標

キリストを信じて新しく造られた者となる。

導入

(飯田勝彦)

新年あけましておめでとうございます！

皆さんは、どんな思いで新しい年を迎えましたか？「今年こそはあれもしよう。これもしよう」と期待に胸を膨らませている人もいれば、去年からの不安や問題を抱えたままで新しい年を迎えた人もいるかも知れません。私たちがどのような思いであったとしてもあなたを愛しておられる神様は、今年もあなたと一緒に歩んで下さいます。今年も、私たちに準備されている恵みを受け取りましょう。

自分では新しくなれない

さて、今日の聖書箇所には「新しく」という言葉が繰

り返されています。皆さんの中で新しい年を迎えて、新しくした物がありますか？ある人は、新年には新しいシャツやパンツを身につける人や、自分の持っている鉛筆やノートなどをすべて新しくする人もいます。それは、周りの物を新しくすることで、心を新たにしたいという思いが込められているように思います。私たちの心は、周りの物が変わったら新しくなるでしょうか。新しい心は、しばらくの間は続くかも知れませんが、でも、時間が過ぎると鉛筆やノートが古くなるように、私たちの心も変わってしまうのではないのでしょうか。

皆さんの中に、「がんばれば、自分は新しくなれる」と思っている人がいませんか？「強い気持ちをもって、しっかりと勉強すれば、新しい自分になれる」って。自分の努力で本当に新しくなれるのでしょうか。そうではないことを嫌というほど経験しているでしょう。

本当に私たちが新しくされるには、まず自分の力で新しくなることは出来ないことを知ることが必要です。

イエス様が新しくしてくださる

では、どのようにしたら新しくなることができるのでしょうか。また、誰が皆さんを新しくしてくださるので

1月

7日 礼拝メッセージ例

でしょうか。それはイエス様です。イエス様だけが、私たちの心を新しくしてくださるお方です。

皆さんは「リフォーム」という言葉を聞いたことがありますか？ 古くなった家を修理したり、増築したりして新しくすることです。でも、この「リフォーム」は、古い部分が残っています。イエス様は、私たちの古い部分を残して新しくされるものではありません。この古い部分とは、罪です。もし、罪を残しておいて、ただ周りの物だけ新しくしても本当の意味で新しくなったとは言えません。

ある所に、非常になが悪く、いつも喧嘩ばかりしている家族がいました。ある時、家が古くなったので家を新しくしました。その家族は、新しい家のために、協力して水道や電気、食費などを節約しました。すると家族に一致が生まれ、仲が良くなったのです。そして、新しい家に引っ越して新しい生活が始まりました。でも、しばらくするとまた前のような仲の悪い家族になってしまったのです。この家族の周りは新しくなりました。でも、家族一人ひとりの心は古いままで何も変わっていないのです。そのように、私たちの内にある古い罪が新し

くされなければ、本当には新しくならないのです。

イエス様は、私たちを新しく造り変えることのできる神様です。そのために十字架にかかり、尊い血を流されました。そして、三日目に死より復活されたのです。

自分の罪を認め、イエス様を救い主として信じる時、私たちは新しく造り変えられます。そして、イエス様の復活の命が私たちの内に与えられます。すると、イエス様を愛し、お友だちを愛する新しい心と新しい生活が始まるのです。

「だれでもキリストにあるなら」とあるように、勉強ができる人や心の優しい人、スポーツができる人だけが新しくされるわけではありません。イエス様を信じる人は誰でも新しくされるのです。

まとめ

皆さんは、もうイエス様を信じて新しく造り変えられていますか。新しくされると愛と喜びがあふれてきます。感謝なことにイエス様は私たちを一度だけでなく、日々新しくして下さいます。

新年、新しくされる恵みを体験して歩みましょう。
♪歌いつづけよう主のあいを♪（ホ77）

聖書 マタイ16・13〜20 テーマ キリストへの信仰告白

序論

(金井信生)

イエスが弟子たちに尋ねられた「あなたがたはわたしをだれと言うか」との問いかけに、ペテロが代表して「あなたこそ、生ける神の子キリストです」と答えました。この答えは主イエスを満足させる答えでした。ペテロの答えは、今も主イエスを信じ救いに入る信仰告白そのものであり、ここからクリスチャンの信仰の歩みが始まっています。

一、キリストに土台する

これまですでに、弟子たちは仕事も家族も捨ててイエスに従ってきました。イエスをキリスト（救い主）と信じていたからです。しかし、このペテロの答えは、ただイエスが救い主であるというだけでなく、「生ける神」すなわち天地創造のまことの神であると告白しています。人間の中から立ちあがっていく救世主ではなく、天からくだってこられたお方だと言いつづけているのです。

ローマの支配下にあった当時、イエスを政治的な救世主と期待する人たちもいました。これは自分の願いに救世主をあてはめようとする、きわめて利己的な考えでした。しかし、クリスチャンであっても、同じ過ちを犯す危険があります。

ペテロの言葉は事実の承認としての信仰告白です。イエスが神の子であり、私たちは人間に過ぎないことを認め、このお方の導かれるところ、命じられることに従うことを言い表わし、天からの命に生かされることを信じ受け入れる言葉です。

「信仰を告白する」といいますが、私たちが何かを見いだしたり、つかんだ結果ではなく、確かな土台、ゆるがない中心は、向こう側、すなわち神の側にあるのです。キリストが木であり、私たちは枝です。自分の立場や生き方を変えず信仰を飾りにする、というのではなく、私たちがキリストに接ぎ木されることです。そこに信仰告白から生まれる力があり、命があります。

飛行機が離陸するために必要な距離は、天候や機種など状況によって異なりますが、飛び立つ瞬間があるはずで、信仰の生涯も、何となく聖書を学び、イエスをぼん

やりと神だと思っているとから、「イエスは私の救い主です。このお方に結びついて生きます」と決心し、告白してスタートすると、主の守りと導きが確かなものとなっていきます。

二、教会の交わりの中で

弟子たちが集まる中で「あなたこそ、生ける神の子キリストです」と告白することは、私たちの集まる中に、私たちとは違う方がおられるということです。同じ人間ならば、誰が**いちばん偉い**かと争うこともあるでしょうが、主を目の前にして、しかも主が誰よりも謙遜けんそんになつてくださっている前で、もはや争うことはできません。

イエスはペテロの信仰告白に対して、「わたしはこの岩の上にわたしの教会を建てよう」と答えられました。この〈岩〉（ペトラ）とは、ペテロが代表して言い表わした信仰告白です。個人的に主に申し上げるだけでなく、様々な違いを持つ人間が一つに集まって、同じ主を仰ぐ交わりの中で告白する現実の中に生きることです。

主が自分を愛し、赦し、受け入れてくださっているその恵みに感謝しながら、人をさばくことはできません。

もしそんなことがあっても、主の御顔を仰ぐ時に、自分の心が碎かれていきます。

教会はただ人が寄り集まっているのではなく、キリストを中心として交わるために、召し集められているのです。すべての人のために来られたキリスト・イエスは、まず一握りの弟子たちを選び、教え導き、イエスを主と信じ告白する者の愛の交わりを広げていくように、身をもって教えられました。

「イエスは私の救い主です」という共通の土台に立つときに教会は揺るぎません。また〈天国のかぎ〉、すなわち天的な権威をもって、神の心を世にあらわしていきます。しかし、この信仰告白から逸れたり、交わりの中に隙すきができると、黄泉よみの力が侵入してきます。

結論

同じキリストに接ぎ合わされて豊かに生かされている私たちです。これからもイエスによって共に生かされていることを感謝し、信仰告白そのものや、これに基づく賛美、また日々の交わりをもって、互いに主に結ばれた恵みを表わしていきましょう。

研究資料

(井上義実)

有名なペテロの信仰告白の個所となる。ガリラヤや北方での伝道は間もなく終わり、十字架に向かってエルサレムに上られる時が近づく。その前に、イエスは弟子たちとの交わりを十分に持とうとされたのである。

テキスト

13 ピリポ・カイザリヤ 現在のシリアのバニアスに当たる。ヘロデ大王が、アウグストゥスから割譲され整備し、息子のピリポが、皇帝に敬意を表してカイザリヤと改名した。地中海沿岸のカイザリヤと区別するため、ピリポの名を冠してピリポ・カイザリヤと呼ばれた。人々**は人の子をだれと言っているか** イエスとは誰か、イエスをどう捉えるかとの問いかけである。今日も、人々はイエスについて、それぞれに自分の考え、受け止め方を持っており、私たち全てへの根本的な問いかけと言える。

14 バプテスマのヨハネ…エリヤ…エレミヤ…預言者のひとり バプテスマのヨハネは、すでにヘロデの手で殺されている(14:1以下参照)。ヨハネの使信と生き様は、同時代の人々に鮮烈な印象を残した。エリヤは終末まで

に、再び現れるという預言が残されている(マラキ4:5)。エレミヤの再来は聖書には言及がないが、外典には触れられている。ユダヤ的伝統の中で、エレミヤという名が上がっている。預言者のひとりという認識は曖昧で、評価も前者より低いものである。

15 あなたがたはわたしをだれと言うか イエスの問いかけは他の人のことではなく、あなた自身はどうなのかと、個人に問いかけられている。

16 あなたこそ、生ける神の子キリストです 並行個所となるマルコ(8:27-30)、ルカ(9:18-21)では、ペテロの信仰告白は、「キリスト」とのみ記されている。キリストには、メシヤとしての意味が込められている。生ける神の子という言葉には、イエスの神性が表されている。救い主の使命をこの世の圧政からの解放と見るか、永遠の救いをもたらす魂の救いとするかには大きな違いがある。ペテロの告白は天につながるものである。

17 血肉ではなく 血肉(ギリ)サルクス・カイ・ハイマ血と(「と」は接続詞)肉という三語から成っている。神性と対比する人間性を表す言葉で、ヘブル的表現である。人間からではなく、聖霊によって、ペテロはイエスを神

の子と告白した。

18 あなたはペテロである。そして、わたしはこの岩の上にわたしの教会を建てよう。ペテロ(ギ)ペトロス)切り出された石。岩(ギ)ペトラ) 石ではなく大きな岩の塊を表す。岩の上に教会を建てるとイエスは言われた。この岩とは何かということが歴史上問われてきた。主要な考え方として、岩とは、①ペテロ個人を指す。②ペテロの信仰告白を指す。③イエスの教えを指す(7・24)。④イエス自身を指す。と、四つの考え方がある。ローマカトリック教会は①ペテロ個人ととる。ペテロの監督権が教皇に継承されており、カトリック教会の權威を主張する。カルタゴの主教キプリアヌスによってカトリック統一論として体系化された。プロテスタント教会は②ペテロの信仰告白ととる。ペテロの信仰告白とする最も古い言及は、クリュソストムスに見られる。バークレーは、「岩はただ神のみであるが、教会はペテロと共に始まった。ペテロは教会の基礎と言えよう」と記す。黄泉の力(ギ)プライ・ハデュウ) 新改訳「ハデスの門」が直訳である。黄泉と訳されたように死後の霊が存在する場所である。より懲罰的な意味合いではゲヘナ「地獄」

が用いられる。教会は死と滅びに対して、勝利を持っていることが宣言されている。

19 天国のかぎを授けよう ペテロは聖霊が降^{くだ}ったペンテコステの日、エルサレムで復活のイエスを証しする説教を行った。三千人の者がイエスを信じ洗礼を受けた(使徒2章参照)。ペテロは、初代エルサレム教会の働きを進めた。さらにカイザリヤのローマの百卒長コルネリオの家では異邦人が救いを受けた(使徒10章参照)。ペテロが天国のかぎを用いることで、多くの神の業が進められていった。地上でつなぐこと…：地上で解くこと…：ユダヤ的な伝承において、律法の教師が用いる表現である。あることがらについて、つながれるということは禁じられることを意味する。解くということは許されていることを意味している。ペテロは、天的な權威をイエスからいただいた。ペテロが力を行使するのではない。ペテロが神の御心を地上に正しく示すことが目的である。

20 弟子たちを戒められた 厳格に命じられたという強い意味がある。イエスがキリストであることを証しする時がまだ来ていないゆえである。

参考図書 Leon Morris (Eerdmans) 他

聖書

マタイ16・13〜20

タイトル

ペテロの信仰告白

暗唱聖句

あなたこそ、生ける神の子キリストです。

マタイ16・16

目標

イエス・キリストへの正しい信仰を告白する者となる。

導入

(後藤 真)

「イエス様ってどんな人？」と聞かれたら、みなさんはどのように答えますか。「昔の人」「聖書に出てくる人」「マリヤさんの子ども」「すごい奇跡をした人」「お祈りを聞いてくれる人」…いろいろな答えが出てきそうですね。わたしなら、「この本にくわしく書いてあるから読んでみて！」と言って、聖書を渡してしまいます。

人々はだれと言っているか？

イエス様は弟子たちに、

「人々は人の子（イエス様）をだれと言うか」

と聞きました。弟子のひとりが答えました。

「ある人はバプテスマのヨハネだと言っています」

バプテスマのヨハネは、人々に悔い改めるように教え、

バプテスマを受けていました。救い主が来る前に、人々を導き、準備するために遣わされた人でした。バプテスマのヨハネはとてもすばらしい預言者でしたが、悪い王様に捕まって殺されてしまいました。このバプテスマのヨハネがよみがえったのがイエス様だと思っていた人がいたのです。

「エリヤだと言っている人もいます」

エリヤは預言者でした。死なないで、神様がつむじ風に乗せて天に昇らせたので、もういちど地上に来ると信じられていたのです。

「エレミヤのような預言者のひとりだと言っている人もいます」

イエス様の語ることばや奇跡を見て、旧約聖書の時代の預言者のひとりだと思っていた人もいました。イエス様はひとりなのに、人々の中にはいろいろな見方がありました。正しい答えは、いったいどれなのでしょう。

あなたがたはわたしをだれと言うか？

イエス様はこんどは弟子たちに

「あなたがたはわたしをだれと言うか」

と、聞きました。弟子たちはイエス様のことをどう思っ

ていたのでしょうか。ちゃんと分かっていたのでしょうか。弟子のひとり、ペテロが代表して答えました。

「あなたこそ、生ける神の子キリストです」

イエス様は神様です。イエス様はキリスト、救い主です。これが弟子たちの答えでした。

いつもいっしょにいて食事をしたり寝たりしているイエス様が神様だとは、ふつうは思わないでしょう。イエス様は立派な方だと思っても、聖書に約束されている救い主キリストとまでは分らないでしょう。イエス様はペテロに言いました。

「あなたはしあわせです。天の父なる神様が、あなたにこのことを分らせてくださったのです。」

イエス様が神様だなんて当たり前だよ、という人がいるかもしれませんが。イエス様が救い主だなんて常識よ、という人もいるかもしれませんが。でも、それはわたしたちの知恵でわかったことではなくて、神様が聖霊をとおして教えてくださったことなのです。聖書を詳しく研究しているのに、このことを信じないという人もたくさんいます。当たり前！というくらいいっしょに信じているわたしたちは何としあわせなのでしょう！

教会

イエス様は続けて言いました。

「あなたはペテロ（岩）です。この岩の上に教会を建てます。また、あなたに天国の鍵をさずけます。」

教会は「イエス様は神様です、救い主です」と信じている人の集まりです。イエス様を信じるといえるのは自分ひとりだけのものではありません。教会を見渡してみてください。歳も仕事も、学校も、住んでいる場所もちがういろいろな人が集まっています。でも、イエス様を救い主だと信じることだけは、みんな同じです。

天国の鍵、とは神様に従う道を示すことや、神様の思いを教える権威のことです。神様の思いを知り、神様に従うとき、わたしたちは天国（神様の国）の民として生きることができます。イエス様は、わたしたちに天国の鍵を用いて、神様の国に生きるしあわせを宣べ伝える働きを手伝ってほしいと願っておられるのです。それが、

「あなたこそ、生ける神の子キリストです」と、信じているわたしたちの生き方なのです。

♪イエスさまがいちばん♪（ホ68、イン旧25他）

聖書 マタイ16・21～26 テーマ 十字架を負う生涯

序論

(高橋頼男)

十字架の死と復活を予告された後、イエスは弟子たちに言われました。「だれでもわたしについてきたいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負うて、わたしに従ってきなさい」。十字架を負う生涯とは、主イエスが歩まれ、そしてわたしたちが歩むべき道とは、どのような道でしょうか。

一、イエスが歩まれた道(21)

イエス様は、十字架に歩まれ、ご自分が受ける苦難の数々を具体的に弟子たちの前に示し、また、あからさまに語られました。そして後、「だれでもわたしについてきたいと思うなら…」と言われました。クリスチャン生涯は、「わたしに従ってきなさい」と言われる主に従い、主の歩まれた道(主の弟子としての道でもある)すなわち十字架の道を歩むことです。

そもそも、弟子(disciple)とは主の模範に習う者であり、その道において主の訓練(discipline)を受ける者で

す。私たちが、主の弟子、クリスチャンであろうとするなら、主に倣^{なま}って自分を捨て、自分の十字架を負い、主に従うことの覚悟をしなければなりません。

しかし、それは、主が歩まれた道です。そこには、主が私のために歩まれた跡がくつきりと残っている道です。その道を、主の足跡を確かめつつ、私たちもまた、一足一足辿らせていただくのです。

二、神の^{なご}み心を優先させる道(24)

〈自分を捨て〉 主の道を歩むためには、自分の道(自己追求の道)を歩むことはできません。主の道と自分の道は、決して交わることがありません。主の道を歩もうとするなら、まず、自分の道を行くことを断念すること、すなわち、自分を捨てる覚悟が必要です。私たちの前には、しばしば主の道を選ぶか自分の道を行くか、二つの選択があります。そこにおいて、主の道、み心の道を選び取ることができるなら本当に幸いです。

主イエスのゲツセマネにおける祈りは、私たちの大切な模範です。主は、ゲツセマネにおいて自分の願いを言い表わしつつ、父のみ心を求めて切に祈られました。ご自分の願いと、父のみ心との狭間で長い苦闘の祈りをな

された後、十字架にかかることこそが父のみ心であることを確信された主は、ついに十字架の道を選びとられた（マタイ26・36～46）。

時に、私たちも主のみ心を求めつつ、苦しい祈りをすることがあるでしょう。それは、決してたやすい祈りではありません。しかし、主が助け、聖霊が励まして祈らせてくださいます。信じ、従って、み心を選び取った時、勝利と確信がきます。

「彼は御子であられたにもかかわらず、さまざまの苦しみによって従順を学び」（ヘブル5・8）とあります。私たちは、とりわけ苦難の中で、祈りを通してキリストに従うこと、すなわち、苦難の中でキリストの従順を学ぶべきです。その時、本当の意味で、主の信仰と服従を身につけるのです。

三、神が各人に備えてくださった道（24）

〈自分の十字架を負うて〉 主の道は、十字架を負う道です。キリストが私たちのために十字架を担われたように、今度は、私たちがキリストの十字架を担うべきです。もちろん、主が負われた十字架そのものを、私たちが負うことはありません。また、そのようなことはで

きません。私たちが負う十字架とは、キリストを信じ、キリストに従って生きる時、主がそこに備えられたキリストのための苦しみをしっかりと受け留め、担うことなのです。しかも、恵みの賜物として負うことです（コロサイ1・29）。

主は、わたしたちのことを良く御存じで、それぞれにふさわしい十字架を備えられ、それを負って私に従ってくるようにと導いてくださいます。私たちは、主が負わせてくださる十字架を避ける事もできますが、避けないで逃げないで、しっかりと担いましょう。今日、主が、負わせられる私の十字架はいったい何でしょうか。

結論

十字架は確かに、苦しい道、困難な道ですが、主が共におられる道であり、主の助けがあり、必ず主の復活に続く道であることを覚えましょう。そして、主が前におかれた希望をもって御苦難を忍ばれたように、十字架の道にある希望を忘れないようにしましょう。

「No Cross No Crown」（十字架無くば冠なし）。自分に与えられた十字架を負って、喜んで主にお従いする者とならせていただきます。

研究資料

(中島啓一)

イエスは弟子たちに、ご自身が救い主としてどのような道を歩まれるかを、このとき初めて示された。それは彼らの(誤った)期待を裏切る、十字架の苦難と死という道であった。その道を弟子たちもまた歩まねばならない。弟子とは、師の模範にならうべき者だからである。私たちも、キリスト者であろうとするならば、自分を捨て、自分の十字架を負うことによつて、イエスに従つていくのだという決意を表明せねばならないのである。

テキスト

21 この時から イエスが公の宣教を始めた時(4・17)と同じ表現。ここが福音書の中の大きな転換点であり、ここからイエスの死に焦点が合わせられた第二の段階が始まることを示す。**自分が必ず** これから告げられることは、弟子たちにはあり得ないことのように思えるが、それらは神の意志による必然以外の何物でもないことを示す。**エルサレムに行き** そこは聖なる都であると共に、預言者の殉教と深い関わりのある地であった(23・37、ルカ13・33等)。**殺され** 直前の個所での告白(16・

16)でペテロが心に思い浮かべていたこととは全く正反対のことである。**三日目に** 「三日」は12・40ではヨナのしるしとの関連で、また26・61他では神殿の破壊と再建の暗喩^{あんゆ}で登場する数字。旧約ではホセア6・2に「三日目に」という表現がある。**よみがえる** 主の復活は28・1他で成就し、初代教会の信仰告白の中心要素となる(1コリント15・4、使徒2・23・24他)。

22 イエスをわきへ引き寄せて、いさめはじめ 古代の師弟関係において、弟子がその師を(特に公の場で)批判することは、最もしてはならないことの一つであった。ペテロはそのルールを破つたのである。イエスの示した真のメシヤ像は、ペテロの胸中にあつたメシヤ像とは全く相容れないものであつた。ペテロに限らず、当時のユダヤ社会の人々が思い描いていたのは、民族を抑圧から解放する「勝利に満ちたメシヤ」だったのである。**とてもないことです** 直訳は「あなたに(神の)慈悲があるように」で、文脈上「そんなことが起こるのを神がお許しにならないように」の意になる。**そんなことがあるはずはございません** この強い否定表現はペテロのメシヤ理解が間違つたものであつたことを如実に示している。

23 サタンよ、引きさがれ 意図せずとはいえ、主の十字架の道を否定し神の意志に背いたペテロを、イエスは荒野での誘惑者に対するのと同じように糾弾した(4・10)。**わたしの邪魔をする者** 「岩」(18)であるペテロは「つまずきの岩」(イザヤ8・14)になってしまった。

24 **だれでも** 直接には弟子たちに語りつつ、全ての人(後世の教会を含む)にも向けられている。**自分を捨て、自分の十字架を負うて** 次節の「わたしのために自分の命を失う者」と合わせ、「イエスとその福音を証しするために、死さえも恐れずに、命をかけてイエスに従う生涯を全うすること」と理解すればよいだろう。「捨て」、「負うて」が不定過去形であるのに対し、**従ってきなさい**は現在形。それは、従うということが一回限りのことではなく、継続的な事柄であることを意味する。

25 **自分の命を救おうと思う者はそれを失い、わたしのために自分の命を失う者は、それを見いだす** ここには逆説的な原理がある。「失う」、「見いだす」は未来形で、終末的な審判を示唆する。「命」(ギプシユケー)は、単なる肉体の命ではなく、より深くより根源的な意味での人間の真の存在の意。「命を見いだす」とは「救う」と

同義と見て良いだろう。利己的に自分の存在を守ろうとする人は、イエスの弟子としての本当の献身のあり方を知ることができず、最後には皮肉にも、自分が守ろうと躍起になってきたものを失って終わる。一方、真の弟子は、なくてはならないただ一つのもの、他のものとを並べることをしてしない。そして、キリストに従うことを貫き通すときに、すべてにまさる栄光の富を受けるのである。

26 **人が全世界をもうけても、自分の命を損したら、なんの得になろうか** 4・11の荒野での誘惑を彷彿させる表現。サタンはイエスにこの世界の栄華を見せ惑した。富の誘惑は道をそれさせる強い力である(6・19-21)。**人はどんな代価を払って、その命を買いもどすことができるか** 「自分の力で買い戻すことは絶対にできない」という意の反語表現。その命を与えるための価は、罪なき神の御子にしか払えなかったのである。私たちは、ただ流された血潮の尊さを思い恵みに感謝して、喜んで自分の十字架を負いつつ、イエスに従っていい。

参考図書 注解書 増田誉雄(新聖書注解)、D. H. Hagner (Word), D. Hill (New Century Bible), その他 The IVP Bible Background Commentary: NT

聖書

マタイ16・21〜26

タイトル

十字架を負って

暗唱聖句

だれでもわたしについてきたいと思うな

ら、自分を捨て、自分の十字架を負って、

わたしに従ってきなさい。マタイ16・24

目標

自分に与えられた十字架を負い、キリストに従う者となる。

導入

(後藤 真)

知らないおじさんに「お菓子をあげるからついておいで」と言われてもついていく人はいませんね。わたしたちの心の中には、得をするならついていこうかなあ、何かもらえるならついていこうかなという気持ちがあるのが気をつけなければなりません。

イエス様にもたくさんの方がついて行きました。でもほとんどの人が、病気を直してほしい、パンが欲しい、イエス様に何かしてもらいたいという気持ちでした。イエス様についていくということは、本当はどういうことなのでしょう？

叱られたペテロ

イエス様に、

「あなたがたはわたしをだれと言うか」

と尋ねられ、

「あなたこそ、生ける神の子キリストです」

と百点満点の答えをしたペテロでした。そこでイエス様は、救い主とはどういうものなのか、これからイエス様がどういう道を歩いていくのかということを、弟子たちに教え始めました。

イエス様に反対している人たちがたくさんいるエルサレムに行くこと。長老や祭司長や律法学者たちからたくさん苦しみを受けて殺されること。三日目によりがえること。それは、つらくて苦しい道でした。

イエス様の話を聞いていた弟子たちは、イエス様が何を言っているのか分からなかったでしょう。弟子たちは、救い主は新しいイスラエルの王様になって、国を立て直す方だと思っていたからです。そしてイエス様こそが新しいイスラエルの王様になる方だと思っていたのです。

我慢できなくなったペテロは、イエス様をわきに引つ

1月

21日 礼拝メッセージ例

張って、

「とんでもないことです。そんなことあるはずありません！」

と、強くイエス様に言いました。イエス様は振り向き、

「サタンよ、引き下がれ。わたしの邪魔をする者だ。あなたは神のことを思わないで、人のことを思っている」と、ペテロを厳しく叱ったのです。

イエス様について

イエス様は弟子たちに向かって言いました。

「だれでもわたしについてきたいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負うて、わたしに従ってきなさい。」

イエス様がこれから歩いてゆく道は十字架の道でした。それはイエス様が自分から喜んで歩きたかった道ではありませんでした。自分の思いではなく、神様の思いに従って歩む道でした。

イエス様はどうして、樂をしてお金持ちになる道を弟子たちに用意しなかったのでしょうか。どうしてイスラエルの王様になって弟子たちを大臣にしてやらなかったのでしょうか。

それはイエス様の救い、永遠のいのちが、お金や大臣

の地位よりも、全世界よりもずっと値打ちがあるものだからです。そしてそれは十字架以外では、どんなにお金を払っても買い戻すことができないものだからです。

それぞれの十字架

わたしたちは、イエス様と同じように十字架にかかって死ぬわけではありません。また人と同じことをしなければならいわけではありません。わたしたちはそれぞれに「自分の十字架」があります。

「十字架を負う」と聞くと、とても大きなことをしなければならいような気になります。でも十字架を負うということは、自分を喜ばせるのではなく、神様の喜ぶことを選ぶということなのです。たとえばそれは、兄弟におやつをゆずるといふことや、つらい思いをしている友だちを慰めるといふた、ふだんの生活の中にもあることなのです。

自分の十字架は何かな？と考えてみましょう。まず、人にゆずったり優しくしたりする小さなことから始めてみましょう。

♪歩こうイエスの道を♪ (PW15、イン81)

聖書 山上での変貌 テーマ マタイ17・1～8

序論

(石田高保)

よく知らない人のことを信用することはできません。聖書は、イエス様にあらゆる角度から照明を当て、安心して人生を任せられるようにしています。

一、イエス様を知る

私たちにとってイエス様とはどういうお方でしょうか。一般的には、四大聖人の一人、西洋の神様、人類の偉大な教師、キリスト教の開祖などと言うでしょう。弟子たちにとってはどういうお方だったでしょうか。ペテロは「あなたこそ生ける神の子キリストです」と言い表しています(16・16)。つまりこの私を救って下さるまことの神です。どのように救って下さるのでしょうか。自分から進んで十字架にかかり、命を投げ出すことによってです。まったく罪も汚れもない、人となられた神だからこそ、私たちの罪を取り除くことができます。ではあなたにとってイエス様とはどういうお方でしょうか。

イエス様はペテロ、ヤコブ、ヨハネの三人だけを連れて

高い山に登られました。いつもと違う、ただならぬ雰囲気を感じたことでしょう。〈彼らの目の前でイエスの姿が変り、その顔は日のように輝き、その衣は光のように白くなった〉。弟子たちは三年半、イエス様と一緒に生活してきましたが、見たことのない姿に変貌するのを見て、腰を抜かしました。これは明らかにイエス様が普通の人間ではない事を表しています。主が人間として生まれてきたことは間違いないことですが、その生まれ方は普通ではなく、父親の介在がなく、聖霊によって宿られました。これは神が人間となるために、計画された独創的な方法です。生まれてからは普通の人間として生きますが、神の国を宣べ伝えるようになってからは、著しい奇跡によってご自分が神であることを表しました。しかし今日の出来事のように、姿を変えたのは、空前絶後でした。なぜイエス様は神々しく変貌した姿を弟子たちに見せたのでしょうか。ご自分が間違いない神の子であることを明らかにするためです。

二、イエス様を見る

これを見た弟子たちの生涯にどのような影響が及んだのでしょうか。終生忘れえぬ経験となり、弟子たちの信仰を強めました。「わたしたちが、そのご威光の目撃者なのだから

ら：わたしたちもイエスと共に聖なる山にいて、天から出たこの声を聞いた」（Ⅱペテロ1・16～18）。ペテロはイエスの変貌する姿をこの目で見たけれども、私たちも聖書を読んだり、説教を聞いたり、み言葉を分かち合ったりするとき、神の言葉を聞き、イエスの姿を信仰の目で見ることが出来ます。栄光のイエスを見るとは、突き詰めればイエスをいつも目の前に置くことです。それは心をかき乱す思いや出来事に目を奪われるのではなく、（イエスのほかには、誰も見えなかった）というように、主を目の前に置くこと。ペテロが訳の分からないことを言い出した時、天から声がして（これに聞け）と言われました。損得勘定で頭がいっぱいになってしまったとき、祈りをもって主に尋ねることであり、み言葉そのものと聖書の価値観で物事を判断し、従ってゆくことです。私たちはこの世と神の国と両方に足を置いています。目に見えるこの世界は、何の努力をしなくても見ることが出来ますが、目に見えない神の国は、意識的に目を注ぐという努力が要ります。栄光に輝くイエスを見るとは、何か神秘的な体験というのではなく、主を目の前に置き続けるという営みです。ふと気がつけばイエス様と会話している自分を発見する、そういう世界で

す。

（イエスと語り合っていた）。どんなことを語り合っていたのかというと、「イエスがエルサレムで遂げようとする最後のことにについて」（ルカ9・31）、つまり十字架の死についてです。モーセは律法の代表、エリヤは預言の代表、つまり旧約聖書は人類の救いを完成するキリストの死に全神経を集中させています。

またペテロはこの山で聞いた神の声を、手紙の中でも書いています。（これはわたしの愛する子、わたしの心になう者である）、この言葉は、主が間違いなく神の子であることにお墨付きを与えています。私たちは、これを自分に語りかけられた言葉とは考えないかもしれませんが。確かに第一義的には、イエス様にかけてられたお言葉です。しかし第二義的には、私たちに語りかけられていると受け取ってよいのです。キリストの血潮のゆえに罪ゆるされ、神と和解し、神の子とされた人は、神の目には愛する子であり、その存在が無条件に受け入れられています。

結論

このみ言葉を自分にも語り掛けられていることを自覚し、愛されて生きましょう。

研究資料

(宮澤清志)

この記事は、マルコ9・2～8、ルカ9・28～36にも登場する。

テキスト

1 六日ののち 珍しく明確な数値である。このことは、前述したとおり、前の個所（ペテロの信仰告白ほか）との関連性の深いことを強調するものと考えられる。ペテロ、ヤコブ、ヤコブの兄弟ヨハネだけを連れて 「だけ」とは直訳すると「ご自分のものに従って」となる。これは、この三人がイエスの側近の者であったことを暗示する。この三人はこの個所の他にも「ヤイロの娘のよみがえり」（マルコ5・37）、そして「ゲッセマネの祈り」（マタイ26・37）においても立ち会うことがゆるされた。

2 姿が変り（ギ）メタモルフォー） 着替えることに表される、表面的な変化ではなく、根本的な変化を指す。あのグロテスクな蛹が羽化して美しい蝶へと変化するような変化を指す。輝き この変化の神々しさを語る。白く この輝きが天的なものであることを語る。

3 モーセとエリヤ この二人については様々な理解されている。モーセは神から律法を付与された「律法」の代表者であり、エリヤは「預言者」の代表である。しかも彼らは山において神と直接語った経験があり（出エジプト31・18、列王上19・9～12）、彼らは二人とも当時の人々からは死んでいないと思われ（列王下2・11参照）。またモーセについてもユダヤの伝承では死ななかったとされている、そして何よりメシヤの時代にはこの二人は戻ってくると信じられていた。語り合っていた ただ単に話しをするだけではなく「会談する」「協議する」という意味がある。この三人は何を「会談」していたのか。ルカは「イエスがエルサレムで遂げようとする最後のこと」（9・31）と語る。この「最後のこと」（ギ）エクソドス）が出エジプトをも意味する言葉である事は、この後起こるエルサレムでの出来事（十字架と復活）が、出エジプトの出来事の踏み直しであることを示唆する。

4 わたしはここに小屋を三つ建てましょう… マルコはこのペテロの言葉に関して、彼らの恐れゆえに何を語ったらよいかわからずにこの言葉を発した、と解説する（9・6）。なお、ペテロのこの言葉の真意は定かでは

ないが、当時、古代中近東の世界では、大切な客には敬意を払ってテントを立てる習慣があった。ペテロはイエス、モーセ、エリヤの三人に対する敬意から、咄嗟（とっさ）にこの言葉を発したのではないかと推測できる。

5 輝く雲 雲は、旧約聖書においては神の臨在のしるしとして登場する（出エジプト24・15～18、40・34～38）。マタイはこの雲に「輝く」を付け加え、この雲が神の目に見える栄光の輝きであることを強調する。これはわたしの愛する子、わたしの心になう者である 詩篇2・7とイザヤ42・1からの引用である。子とは、いわゆる血縁関係という意味ではなく、父なる神との関係において父なる神から遣わされ、なすべき働きへと任じられたという意味である。ちなみに詩篇2・7は、イスラエルの歴史において、王の即位式において歌われた詩であり、イエスが王の王、メシヤであることの父なる神の宣言であると言える。一方イザヤ42・1は、メシヤはしもべであることを意味する。本節に表されるメシヤは、王であり、かつしもべでもあるのである。なお、この言葉はイエスのバプテスマに際しても語られており（3・17）、イエスの王としての就任式に語られた言葉が再び受難を前

にして繰り返されたことになる。そして、このイエスの言葉に聞くようにと神は語られるのである。

6 三人の弟子たちの、この神のみ声を聞いた反応が示されている。顔を地に伏せた とは、直訳では「彼らの顔の上に倒れた」となり、ひれ伏して顔を上げられない状態を指す。このような、神の聖なる臨在に触れ、圧倒される体験は、聖書中様々な個所にみられる（イザヤ6・5、エゼキエル1・18～2・1、ダニエル8・17など）。この恐れこそ、礼拝における鍵であり、神の臨在と神の御声のあるところには必ず生じるものである。

7～8 イエスは近づいてきて ここでのイエスは弟子たちが見慣れたイエスであった。イエスのほかにはだれも見えなかった。ここに、律法の終わりと預言者の成就がキリストによってもたらされたと見る者もいる。

参考図書 中澤啓介『マタイの福音書註解』（いのちのことば社）、A. T. Robertson『Word Pictures in the New Testament』（BROADMAN）他

聖書

マタイ17・1-8

タイトル

イエス様の本当のお姿は？

暗唱聖句

これはわたしの愛する子、わたしの心にかなう者である。これに聞け。

マタイ17・5

目標

栄光の王キリストを覚え、御声に聞きつつ、従う者となる。

導入

(松浦みち子)

イエス様のお誕生をお祝いする日は、クリスマスですね。赤ちゃんイエス様のベッドは、家畜のえさを入れる飼葉おけでした。大きくなったイエス様は大工のお父さんのお手伝いをしたり、お母さんのお手伝いや、弟たちの遊び相手になってみんなと同じように毎日を過ごしました。成長されバプテスマのヨハネから洗礼を受けた時、天からみ声が聞こえ、聖霊が鳩のようにイエス様の上に下ってきて、その後イエス様は人々に神様のメッセージを伝える働きを始められました。

光り輝くイエス

ある日、イエス様は弟子たちのうちペテロ、ヤコブ、ヨ

ハネ三人を誘って「一緒に山に登ろう」と声をかけ、高い山に登って行きました。「よいしょ、よいしょ」。頂上はまだまだです。「もう少しだよ、頑張つて!」。ついに頂上にたどり着きました。すると突然、ペテロたちが見ている前で、みるみる間に、イエス様の姿が変わったのです。わあ、驚きのあまり言葉も出ません。その顔は太陽のように明るく輝き、着ていた服は光のように真っ白になりました。まぶしくて見てられないほどです。でも、よく見ていると、光の中でイエス様のそばに二人の人がいて何か話をしています。目を凝らすと、一人はずっと昔にイスラエルの人たちをエジプトから連れ出したモーセです。もう一人は、神様の事をみんなに伝えた預言者エリヤです。この三人は、イエス様のエルサレムでの最後の十字架のことについて話していたのです。その光景を見てペテロは息もできないほどびっくりして言いました。「イエス様、私たちがここにいるのは素晴らしいことです。もし、よかったらわたしはここに家を三つ建てましょう。一つはイエス様のために、一つはモーセのために、一つはエリヤのために」。ペテロはもう自分が何を言っているのかわからないほどの驚きようです。

天から響いた声

ペテロが話しているうちに、光り輝く雲がもくもくともあらわれ、イエス様たち三人を包みました。そして雲の中から神様の声が聞こえてきました。「これはわたしの愛する子、わたしの心になう者である。これに聞け」。弟子たちは神様の声を聞くとびつくりして恐ろしくなり、地面に頭をすりつけてひれ伏し、ブルブル震えていました。すると、イエス様がペテロたちに近づいてきてトントンと優しく肩に手を置きおっしゃいました。「起きなさい。恐れることはない」。彼らは恐る恐る顔を上げてみるとイエス様だけがおられました。山から下って来るとき、イエス様は弟子たちに「今見たことを、わたしが十字架にかかってよみがえるまでは、だれにも話してはいけません」とおっしゃいました。イエス様は三人の弟子たちだけにご自分の本当の姿を見せて下さったのですね。

イエス様だけを見る

イエス様が洗礼を受けられた時も天から声がありました。「これはわたしの愛する子、わたしの心になう者である」(マタイ3・17)。山でのみ姿を通し、イエス様が神様の子であることがはっきりと示されたのですね。

今日、学んでいる天からの声には「これに聞け」という言葉が付け加えられていることに目を留めましょう。このことは何を意味するのでしょうか？ ペテロはイエス様のすばらしい姿を見た時、「イエス様、ここに家を三つ建てましょう」と、とっさに言いましたが、わたしたちがイエス様のために何かをするということではなく、イエス様に聞く、従うことの大切さを忘れてはなりません。ペテロは後の日に手紙を書き残しました。ペテロの第二の手紙1・17では「自分たちがみんなに語っていることは、作り話ではなく実際に体験したことなのだ。『これはわたしの愛する子、わたしの心になう者である』という天からの声を聞いたのだ」と証しています。そして、素晴らしい体験よりも、預言の言葉である聖書が確かなものであることを教えています。

わたしたちの目にいろいろなものが見えます。それらに心が奪われてイエス様以外のものに夢中になってしまふことがあります。「イエスのほかに、だれも見えなかった」とあるようにイエス様から目を離さないように、イエス様のみ言葉に耳を傾け、従って歩みましょう。

♪主にしたがいゆくは♪(コ53、こ改119、ホ87他)

1月

28日 礼拝メッセージ例

聖書 マタイ18・1～5 テーマ 幼な子のように

序論

(中島啓一)

この世は優劣に基づく序列が幅を利かせます。そしてそんなこの世の価値観が、ともすれば教会の中にさえ入り込もうとします。しかし天国の前味である教会は、その侵入を許してはなりません。主イエスが弟子たちに教えられた、天国の価値観とはどのようなものでしょうか。

一、だれが偉いかを気にする弟子たち

弟子たちが主イエスに、「天国ではだれがいちばん偉いのですか」と尋ねましたが、彼らのこの議論に先がけて、主はご自身の死と復活を予告されていました(17・22～23)。後に主が同様の予告をされた直後にも、ゼベダイの子たちが御国での特別な地位を求めます(20・17以下)。最後の晩餐の最中でさえ、相変わらず弟子たちはだれが偉いかで争論しているのです(ルカ22・24)。主がご自身の受難と復活について何度語っても、弟子たちの関心は自分たちの序列にしか向けられていませんでした。本来ならば、主イエスを十字架へと追いやる自分たちの罪深

さに目を向けねばならなかったにもかかわらずです。

これは、彼らだけの話ではありません。私たちもまた、私たちの罪のために贖いの犠牲となつてくださった主イエスの十字架の血潮の恵みを忘れるときに、教会は一致を失い、さばき合いや序列争いに終始してしまふのです。

二、幼な子のように自分を低くする

天国ではどちらが上か、などと競い合っている時点で、天国に入ることすらできません。そうならないために、主イエスは「心をいれかえて幼な子のようにしなければ、天国にはいることはできない」と言われたのです。「心をいれかえて」とは、「悔い改めて、向きを変えて」と訳せる言葉です。優劣を競い合うこの世の価値観から、全く違うものへと方向転換しなくてはなりません。そしてそれは「幼な子のように」なることだと言うのです。

しばしば誤解されることですが、ここで主イエスは、幼な子の素直さ、無垢性などについて語っているのではありません。もし主イエスがここで無垢性(実際は、幼な子といえども神の前には罪人ですが)について語っているとしたら、その条件を満たして天国に入れる人は一人もいないでしょう。そうではなく、主がここで語って

いるのは、子どもの弱さや依存性についてです。当時のユダヤ社会では、幼な子はちっぽけで取るに足りないもののたとえに用いられました。もちろん幼な子をそのように見なしていたのは当時の人々であって、主イエスにとつては幼な子も価値ある存在です。だからこそ主は彼らを「まん中に立たせ」て光を当てられました。そして弟子たちに対し、「幼な子を取るに足りない者とみなすあなたがたは、自分を一端の者であるかのように考えているが、天国に入るためには、自分自身こそ取るに足りない者であることに気づかなくてはならないよ」と教えられたのです。神の前では、人と比べての自分の優劣など全く虚しいものです。必要なことは、そんな自分の弱さ、罪深さを深く認め、神のあわれみにすがることなのです。

「自分を低くする者が、天国でいちばん偉いのである」。

このように天国の価値観は、優劣を競うこの世のそれとは正反対です。天国は、「上下逆さまの国 (Upsidedown Kingdom)」と言われます。自分がそこに入るのにふさわしいと考えている人は決してそこに入ることはできず、逆に、自分はそのに全くふさわしくない罪深い者であることを認め、けれども神様からの贈り物としてそれを受

け入れる人だけが、そこに入ることができる国なのです。

三、幼な子をイエスの名のゆえに受けいれる

続いて主イエスは、最も無価値であると大人たちが考える幼な子を、「わたしの名のゆえに受けいれる」ように命じておられます。もちろんその真意は、幼な子だけでなく「全ての人を」です。そしてそれは「わたしを受けいれる」ことだと主はおっしゃるのです。「わたしの兄弟であるこれらの最も小さい者のひとりにしたのは、すなわち、わたしにしたのである」(25・40)とあるとおりです。「キリストは彼のためにも、死なれたのである」(ローマ14・15)。この事実こそが、私たちを高ぶりの危険から遠ざけ、天国の価値観に基づいて互いに愛し合い、仕え合うことを実現させる力の源泉です。罪深い私のために、キリストは十字架で命を捨てて下さいました。そのお方が目の前のこの人のことも愛しておられるのです。

結論

幼な子とはまさに私たち自身であり、そして目の前の隣り人です。限らない恵みによって主に受け入れられていることを感謝しつつ、互いに愛し合い、仕え合うなら、教会は地上にあっても天国を表すものとされるのです。

研究資料

(宮澤清志)

マタイは、彼の福音書の中で、イエスのおしえ(説教)を5つの個所にまとめている(5〜7章/10章/13章/18章/24〜25章)。

この個所は、そのうちの4番目の説教である(この説教の始まりをどこにおくかは注解者によって多少の相違がある。ある注解者は第4の説教の始まりを17・24に見る)。イエスはこの個所で、ご自身が建てられた教会の倫理観を示される。教会は、単に同心の者が便宜上構成する組織ではなく、イエスによって建てられた(16・18)ものであり、「天の御国」の地上的な現れともいえる場所である。しかし、残念なことに、彼らは完全ではない。罪や弱さを持ち、プライドや不信仰の中にいる。結果、様々な問題を引き起こし、あるいは巻き込まれてしまう。そのような事態に直面したときに、神の民はどのようにふるまうべきであろうか。この個所はそのような問題に対する示唆を与える個所である。

なお、本個所は、並行記事としてマルコ9・33〜37、ルカ9・46〜48にも記載されており、当該個所にも目を

通して備えていただきたい。

テキスト

1 弟子たちが 他の並行個所との相違点の一つ。他の福音書では、弟子たちが論じ合っていたところにイエスがやってきたとされている。しかしマタイによれば、弟子たちの方からイエスに近づいて質問したとされている。天国ではだれがいちばん偉いのですか この個所も他の福音書との相違のある個所である。特にマルコでは、弟子たちの間で誰が一番偉いかという現在の序列についての論争であるのに対して、マタイでは弟子の間での順位ではなく「天国」では誰が一番偉いかという問いかけになっている。また、「誰が一番偉いか」というテーマは、この後更に20・20〜28にも繰り返される。この問いは、イエスの三度目の受難予告(20・17〜19)の後に起こっている。本日のテキストの前にも二度目の受難予告がある(17・22〜23)。このように考えると、当時の弟子たちにとつての関心事は、イエスの受難よりも優劣争いであつたという弟子たちの弱さが反映されている。

2〜3 幼な子 おそらく近くで遊んでいた小さな子であろう。心をいれかえて 新改訳では「悔い改めて」と

訳し、同時に欄外注に「向きを変えて」という直訳を載せている。方向転換を指す言葉である。それまでの「誰が一番偉いか」という偉さを求めるあり方から向きを変えて、幼な子のようになることを求めたものである。具体的には次節のイエスの言葉にその真意がある。**幼な子のように** 多くの注解者が、幼な子の具体的な特性を挙げている。たとえば、誰かに頼らなければ自分だけでは生きていけない、誰かの保護を必要とする、というような特性が挙げられよう。しかし、ここで最も言わんとするところは、幼な子の社会的立場のゆえである。幼な子は社会的立場を持たず、また自ら求めることをせず、自らの無力さを知っている存在である。権力や財力、地位とは無関係に生きる存在の代表として、イエスは幼な子を取り上げたのである。**天国にはいることはできない** イエスは弟子たちの「誰が一番偉いか」という問いから出発して、天国にはいるための条件という、神の民のさらに本質的な問いを弟子たちに示している。

4 この記事はマタイ独自の記事であり、マルコとルカにはこの記述はない。ここに、当初弟子たちが問うた「天国では誰が一番偉いか」(1)という問いの答えがある。

それは「自分を低くする者」すなわち謙遜さである。大人の世界は、年功序列、政治的手腕、経済的資本、軍事などによって格付けがなされる世界である。それに対して子どもの本質は、弱く小さい者であり、助けを必要とする存在である。低さ、謙遜さこそが、天の御国において問われることなのである。それは、ちょうどイエスがご自身のことを「へりくだっている」と語られた言葉と同じである(11・29)。

5 この節は前節までの結論であると同時に6節以降に続くものと理解できる。**このようなひとりの幼な子** 前節までの、大人に対する子どもではなく、イエスの弟子たちを指す。**わたしの名のゆえに** イエスの弟子たちは、幼な子のように小さくつまらない者である。しかし、彼らはイエスのもの(所有)であるがゆえに、彼ら(イエスの弟子たち)を受け入れる者はイエスご自身を受け入れる者なのである。**受けいれる** 引き受ける、認める、歓迎するなどの意味を持つ。

参考図書 中澤啓介『マタイの福音書註解』(いのちのことば社)、A. T. Robertson『Word Pictures in the New Testament』(BROADMAN) 他

聖書

マタイ18・1-5

タイトル

幼な子のように

暗唱聖句

心をいれかえて幼な子のようにならな

れば、天国にはいることはできないであ

ろう。

マタイ18・3

目標

幼な子のようにへりくだった心で生きる。

導入

(和田牧子)

皆さんは、お友達や兄弟と毎日楽しく遊んでいると思います。時には、ゲームやかけっこでだれが一番強い競争したりするでしょう。負けても勝っても、仲良く遊べたら楽しいですね。でも勝った人が傲慢して、「この中で僕が一番偉いんだ!」と傲慢したらどうでしょう。何となく、嫌な気持ちになり、楽しくなくなりますよね。

だれが一番?

実はイエス様の弟子たちは、しばしばだれが一番偉いのかでもめていました。

「私が一番年上だから、天国では一番えらいのさ。」「いいえ、イエス様に一番愛されているこの僕が天国では

偉いんだ。」「よし、それならイエス様にお尋ねしてみよう。」

というわけで、弟子たちはイエス様のもとに行き、尋ねました。「いったい、天国ではだれが一番偉いのでしょうか?」

小さい子どもが一番

するとイエス様は、近くにいた幼な子(小さい子ども)を呼び寄せ、皆の真ん中に立たせて言われました。

「よく聞きなさい。心をいれかえて、幼な子のようにならなければ、決して天国にはいることはできないでしょう。」

弟子たちは、びっくりしたでしょうね。「自分たちは特別にイエス様から選ばれた弟子なのに、イエス様に喜ばれるよう、いっぱいお手伝いしてきたのに:。」「心をいれかえてつて、どういうこと? このままでは、天国に行けないってこと?」と思ったでしょう。

イエス様の弟子だから当然天国に行けて、しかもイエス様のみそばで、高い地位が与えられると、かん違いしていたのです。

幼な子のような心

イエス様は続いて言われました。「この幼な子のように自分を低くするものが、天国でいちばん偉いのです」。小さな子どもは、まだ一人では生きていけませんね。大人にお世話をしてもらわなければ、食べることも着ることもできません。大人がそばにいてくれることで安心し、大人に守られて生活していく弱い存在です。イエス様は、「天国に入るためには、自分は取るに足らない小さな者ですと、気づかなくてはなりません」と教えられたのです。

何かを一生懸命努力して、立派な成績をおさめることは素晴らしいことです。でも、人と比べて自慢し、他の人を見下げるなら、それは自分を高くする生き方です。

A子さんは、この聖書の箇所を読んで、はっと気がついたそうです。A子さんには、弟と妹がいるのですが、ついついお姉さんぶって、ピシピシ怒っていました。また別の人から「上から目線の人」と言われました。イエス様を信じているつもりでしたが、深く反省したそうです。「神様、心の低い者として下さい」と毎日祈る必要があります。

心をいれかえた弟子たち

さて、だれが一番偉いかと、しばしば争っていた弟子たちですが、ある時からビタツとしなくなりました。それは、十字架で死なれ、その三日後によりがえられたイエス様にお会いしてからです。イエス様が十字架につけられたとき、弟子たちはみんな怖くなって逃げ出してしまいました。でも、復活なさったイエス様は、そんな弟子たちを愛して、赦 ゆる して、もう一度神様のお仕事に用いようとしてくださいました。

弟子たちは、イエス様の十字架の苦しみが、弱い自分の罪のためだとはつきり分かり、ごめんなさいとおわびし、心を入れかえたのです。

まとめ

私たちは、高ぶりやすい弱い者です。そのことを認め、「イエス様の十字架の死は私のためです」と信じましょう。そして心を低くして、家族やお友達を愛して、仲良く天国への道を進めるように祈っていきましょう。

♪わたしのよに♪ (ホ98、イン75他)

聖書 富める青年の悲しみ テーマ マタイ19・16〜26

序論

(石田高保)

人間は自分の存在している意味をさまざまな方法で確かめたいと願うものではないでしょうか。

一、こころ満たされない生活

ここにひとり心の満たされない青年がいます。彼は裕福であり、高い教育を受け、品行方正で、健康でもあり、何一つ不自由なことはないように見られていました。当時、お金持ちであることは神の特別な祝福を受けていると考えられていました。けれども彼の心は満たされず、悩んだすえ有名なイエスに解決を求めてやって来ます。(先生、永遠の生命を得るためには、どんなよいことをしたらいいでしょうか)。実に誠実な質問です。彼はもつと財産が欲しいとか、地位が欲しいとか、贅沢がしたいと言ったのではありません。永遠の生命という目には見えないけれども、人間にとって最も大切なものを真剣に求めているのです。

それに対してイエス様はこう答えられます(もし命に入りたいと思うなら、いましめを守りなさい)：「殺すな、姦

淫するな、盗むな、偽証を立てるな。父と母とを敬え」。また「自分を愛するように、あなたの隣り人を愛せよ」。これに対して青年は、(それはみな守ってきました。ほかに何が足りないのでしょうか)。彼は自分の真面目な生き方を誇りとし、生きる拠り所としています。自分が正しい生き方をすれば、それに対して神が報酬を与えてくれるものと考えています。裏返せば真面目に生きなければ神は祝福して下さらないと思っているわけです。つまり自分の人生は自分の行いにかかっているものであり、律法どおりに正しく生きるかどうかで自分を評価しているのですが、それでは心が満たされませんでした。

するとイエスは(もしあなたが完全になりたいと思うなら、帰ってあなたの持ち物を持って払い、貧しい人々に施しなさい。そうすれば、天に宝を持つようになろう。そして、わたしに従ってきなさい)。イエスは誰に(だれ)対しても全財産を投げ出さなければ、永遠の命を得ることはできないと言っているわけではありません。この青年のように財産を心の拠り所になっている人に対してチャレンジしているのです。いや、財産だけでなく自分の誇りとするものを拠り所としている人に対してチャレンジしています。仕事、地位、

健康、趣味、スタイル、容貌、自分の正しき、人には何でも心の拠り所となり得えます。しかしそれらは良いものであっても、人を心から満足させるものではありません。偽りの拠り所であって、必ず人を裏切るものです。それができるのはイエス様だけです。《青年は悲しみながら立ち去った。たくさんの資産を持つていたからである》。王より飛車を可愛がりと言いますが、自分の財産と永遠の命を天秤にかけたとき、財産の方を取り、手放すことができませんでした。さてあなたはイエス様以外に拠り所としているものは何でしょうか。

二、こころ満たされる生活

大多数の日本人が宗教に対して距離を置くようになった理由の一つは、豊か過ぎることにあると言われます。それはみんなが資産家になったという意味ではなく、神を必要に感じられないほど豊かになってしまったということなのです。大概のことがお金さえ出せば解決する社会になっているので、わざわざ神頼みする必要を感じないわけです。「あなたがた貧しい人たちは、さいわいだ」(ルカ6・20)とあるとおり、実際、貧しい人は自分の持ち物に頼れず、神にだけ頼ろうとするので、神に立ち返りやすいようです。

いつばう豊かな人は、神に頼らなくても自分で解決しようとするし、たいていのことはできてしまい、意識しないで神から自分を遠ざけるので、ますます神がわからなくなります。《富んでいる者が天国にはいるのは、むずかしいものである》こともむべなるかなです。

では文字どおり貧しくなければ救われないのかということでもありまあせん。「こころの貧しい人たちは、さいわいである」(マタイ5・3)。多くの日本人のように豊かであっても、自分は頼りにならない、神に頼りたいという、心が神に対してオープンな人は救われやすいと言えるでしょう。《もしあなたが完全になりたいと思うなら、帰ってあなたの持ち物売り払い、貧しい人々に施しなさい》。文字どおりの意味ではなくても、身近な人への親切でも、ボランティアでも、誰かに自分を与えるとき、人の心は満たされます。ですから「受けるよりは与える方がさいわい」なのです(使徒20・35)。

結論

主はできないことをしろと命じられているではありません。自分の持っている何かを人のために与えるようにチャレンジしておられるのではないのでしょうか。

研究資料

(辻林和己)

この個所だけでなく他の福音書の並行記事（マルコ10・17～27、ルカ18・18～30）にも目を通し、共観福音書（マタイ、マルコ、ルカ）による相違点にも目を向けたい。この個所の前に、主が「幼な子らを招き、彼らの上に手をおかれた」（19・13～15）記事があることに留意したい。

テキスト

16 ひとりの人 マタイによればこの人は「青年」である（19・22）。マルコによれば資産家（10・22）、ルカによれば役人である（18・18）。どういう役人かはつきりしないが、新共同訳では「議員」と訳されている。ユダヤ教の指導者で高い地位にあったのであろう。永遠の生命を得るためには、どんなよいことをしたらいいでしょうか。当時の多くのユダヤ人は、律法を行うことによって救われると考えていた（ローマ9・32）。この青年は永遠の生命を得ることができる確信を持てず、主のもとに来て尋ね求めた。なにか「よいこと」を「する」ことによってそれを得られると考えている。しかし、絶対的な意味

で「良い」と形容できるのは神だけである。

17 よいかたはただひとりだけである 主イエスは、この青年の視点を神ご自身に向けようとしておられる。

18～19 いましめ 出エジプト20・12～17、申命記5・16～21に記されている「十戒」の第五戒以下の対人関係についての律法。自分を愛するように、あなたの隣り人を愛せよ レビ19・18の引用。主イエスは彼に隣人との関わりを問われた。

20 それはみな守ってきました この人には、律法をずっと守ってきたという自負があった。しかし、それ（律法）は、主が山上の説教で語られたように（マタイ5・21～48）、人の内面にまで深く関わるものであった。彼の律法に対する認識はあまりにも皮相的なものだったのである。彼とは対照的に使徒パウロは、律法とは何かを神と自分に深く問うた（ローマ3・20～24等）。

21 マルコでは、主は「彼に目をとめ、いつくしんで言われた」（10・21）とある。愛のまなざしで、永遠の生命へ招こうとされた。青年は十戒を守っていると思っていたが永遠の生命を得ている確信はなかった。何が足りないのかを問う青年に対し、完全になりたいのならば持ち

物を売り、貧しい者にほどこし、主に従うことを求められた。主は「自分を捨て、自分の十字架を負うて、わたしに従ってきなさい」(マルコ8・34)と言われたが、求めておられるのは自我の要求を否定し、神の御旨に生きることであつて、ここで主は救いの条件が善行にはないことを明らかにしておられる。

22 神と富に兼ね仕えていた彼には主の言葉に従うことはできなかった(6・24)。多くの財産や物質的なものは神との関係の妨げとなりやすいのである。悲しみながら立ち去った このとき、彼が主イエスのもとから立ち去らず主から命じられたことを実行できない自分の弱さや罪を認め、さらに主に救いを求めていけば、主にさらに取り扱われたであろう。「議員」と「取税人」の違いはあるが、金持ちだったザアカイは悔い改めて救われている(ルカ19・1～10)。(この青年の悔い改めの可能性については、P・ウイルクス著『救霊の動力』113頁を参照のこと。)

23 天国 は直前の幼な子らの記事にもあるように、自分の無力さを認め、主にすがり、主の救いを信じる者のみがあることができる。何も持たない幼な子らと地位

も財産も名誉もある青年との対比がなされている。

24 らくだが針の穴を通る らくだは当時、ユダヤ地方で最大の動物と思われていた。これは不可能であることを表す一種の誇張的表現。しかし、富んでいる者が神の国にはいるよりは、…もっとやさしい との主の言葉に弟子たちは困惑した。

25 ユダヤでは財産を豊かに持つ者は神から祝福された者であると考えられていた。そのような者が神の国に入ることが難しいということであれば、誰が救われることができるかと弟子たちは考えたのである。

26 人にはそれはできないが、神には何でもできない事はない 救いは人の力によつては獲得することはできない。ただ、父、御子、御霊なる三位一体の神のみがなされるみわざである。主の十字架と復活による救いは神からの賜物であつて、人はそれを信じて受け取るだけである。

参考図書 内田和彦「マタイの福音書」『新実用聖書注解』、増田誉雄「マタイの福音書」『新聖書注解 新約1』(以上のちのことば社)、他

聖書

マタイ19・16〜26

タイトル

富める青年の悲しみ

暗唱聖句

人にはそれはできないが、神にはなんでもできない事はない。 マタイ19・26

目標

砕かれた心でキリストを信じ、救いを受け取る者となる。

導入

(土屋開夫)

電車やバスには「シルバーシート」(優先席)というのがありますよね。ご高齢の方や体の不自由な方、またお腹に赤ちゃんがいる方のための座席です。シルバーは何色の事かわかりますか? そう、銀色です。ご高齢の方の白髪が銀色に見えるのでこう言います。皆さんは電車やバスで席をゆずってさしあげた事がありますか?

ところで私たちの心にも「ゴールド(金色)シート」とでも言うべき大切な優先席があります。この席は自分にとって一番大切な方に座ってもらうための席です。

富める青年

ある時、一人の青年がイエス様のところにやって来ま

した。とってもお金持ちだったそうですから、きつととても高そうない服を着て、金や宝石の飾りもつけて、いかにも立派そうな外見だったことでしょう。

そして、お金持ちというだけでなく、「十戒」を始めとする聖書の教えをよく守って、真面目に生きてきたようです。この青年は「お金」も、また「自信」もたっぷり持っていたのです。

みんなの中にも似ている子がいるかも知れませんね。「ボクは、パパやママや学校の先生からも、『○○ちゃん』は良い子だねー」ってよくほめられるんだ。学級委員もしてるし、テストもいつも90点以上とってるし、バイオリンも習ってる。そしてボクのパパは会社の社長なんだ。大きな犬だって飼ってるんだ…」。

どんなよいことをしたら…

この青年はイエス様に質問しました、「先生、永遠の生命を得るためには、どんなよいことをしたらいいでしょうか」(16)。永遠の命が欲しい、天国に入れる約束が欲しい…、そういう願いがあったのでしょう。そして、もしかししたら、既に90点はとれている自信があったのかも

知れません。

でもイエス様はこう言われました、「よいかたはただひとりだけである」(17)。本当に良い方、完全に正しい方は、本当の神様だけです。人間はどんなに良いことをしたとしても、永遠の命を得られるほど、また天国に入れるほど良いものになることは決して出来ません。心に自分ではどうすることもできない「罪」があるからです。

イエス様はその事に気づかせるために、こう言われました、「もしあなたが完全になりたいと思うなら、帰ってあなたの持ち物売り払い、貧しい人々に施しなさい」(21)。この言葉を聞いて、青年は悲しみながら立ち去りました。この青年の心の「ゴールドシート」には、お金や財産が座っていたのです。この青年にとって、心の中で一番大事だったのは、そして頼りにしていたのはお金や財産だったのです。それを手放すことは、彼にはまだ出来ませんでした。永遠の命よりも、イエス様よりも、財産の方が大事だったのです。

どうすれば永遠の命を得られるか

どうすれば永遠の命を得られるのでしょうか？ どうす

れば天国に入ることが出来るのでしょうか？ それは心の「ゴールドシート」にイエス様をお迎えすることです！ その席は、王様であるイエス様だけが座るべき、イエス様の「優先席」なのです。

今、キミの「ゴールドシート」には、何が座っていますか？ 自分ですか？ それとも大切な宝物？ もしかして、スマホ？ ゲーム？

まとめ

イエス様は言われました、「富んでいる者が天国にはいるのは、むずかしいものである」(23)。心の中に宝物をいっぱい持つてる人は、イエス様に「ゴールドシート」をゆずるのが難しいでしょう。でもイエス様は「難しい」とは言われましたが、「不可能」とは言われませんでした。その証拠に聖書では、東の博士やザアカイさん等、お金持ちの人もイエス様を受け入れ、宝物をささげています。「人にはそれはできないが、神にはなんでもできない事はない」(26)のです！

♪もうふりむかない♪ (PW18、イン86)

聖書 マタイ20・20～28 テーマ 仕える生き方

序論

(金井 望)

神の僕として仕えるために来臨された主イエスのお姿を学びたい。

イエスは山上で、弟子たちに天上の栄光をお見せにされた。それからすぐに主は彼らを連れて山を降りて行かれた。山麓に広がる世界は悪霊が暗躍し、民族、家柄、地位、権力、武力、財力、体力、知力、年齢、性別といった諸条件において、持てる者が持たざる者を支配する冷酷な階級社会である。その現実のただ中に神の御子イエスは降つて来られ、自ら新しい人間の生き方を示されたのである。今日もイエスを見つめ、御声を聴こう。

一、成り上りを志向する弟子たち

イエスが3度目の受難予告をされた（そのとき、ゼベダイの子らの母が、その子らと一緒にイエスのもとにきてひざまずき、何事かを願った。：彼女は言った、「わたしのこのふたりのむすこが、あなたの御国で、ひとりはあるの右に、ひとりは左にすわれるように、お言

葉をください」。ゼベダイの子らとはヤコブとヨハネである（4・21）。彼らはイエスの山上の変貌を目撃し、受難の予告を聴いて、イエスがまもなく王として君臨されるのだと思った。その話を聞いた彼らの母は、師であるイエスに息子たちの出世を頼み込んだのである。

「イエスは答えて言われた、「あなたがたは、自分が何を求めているのか、わかっていない。わたしの飲もうとしている杯を飲むことができるか」。イエスが飲まれる「杯」とは十字架刑のことである。これからイエスは、神に背いてきた人類すべてが飲むべき神の憤りの「杯」（26・39、詩篇11・6、イザヤ51・17）を代わりに飲み干される。

イエスの問いに「彼らは「できます」と答えた。イエスは彼らに言われた、「確かに、あなたがたはわたしの杯を飲むことになる。しかし、わたしの右、左にすわらせることは、わたしのすることではなく、わたしの父によって備えられている人々だけに許されることである」。ヤコブは後に12使徒の中で最初の殉教者となり（使徒12・2）、ヨハネも迫害を受け、晩年にはパトモス島に流刑とされた（使徒4・3、黙示録1・9）。

〈十人の者はこれを聞いて、このふたりの兄弟たちのことで憤慨した〉。他の弟子たちも、実は彼らと同様の成り上がり志向を持っていた。確かに主イエスは12使徒に特別な地位を約束しておられる(ルカ22・30)。ただし、そのために彼らはこの後、多くの試練を経なければならぬ。

二、強権をふるう支配者たち

主イエスは弟子たちを呼び寄せて言われた、〈あなたがたの知っているとおり、異邦人の支配者たちはその民を治め、また偉い人たちは、その民の上に権力をふるっている〉。この時代はローマ帝国が圧倒的な軍事力によって地中海世界を支配していた。ローマはユダヤ人に重税を課し、財産を没収し、皇帝崇拜を強要し、反抗する者を虐殺した。エルサレムの神殿を中心とするユダヤの指導者たちやガリラヤの領主ヘロデ・アンテパスはローマにおもねるばかりか、自分たちも人民から可能な限り搾取し、暴政を行った(マルコ11・17、ルカ3・19、20)。「結局、世の中、金と力がすべてさ」と庶民が嘆くのは、昔も今も変わらない。

三、へりくだって仕えるイエス

しかし、イエスはこの世の人々とは正反対の生き方を弟子たちに要求された。〈あなたがたの間ではそうであつてはならない。かえって、あなたがたの間で偉くなりたいと思う者は、仕える人となり、あなたがたの間でかしらになりたいと思う者は、僕とならねばならない〉。そして、イエスは自らそのように生きて模範を示されたのである。〈それは、人の子がきたのも、仕えられるためではなく、仕えるためであり、また多くの人のあがないとして、自分の命を与えるためであるのと、ちょうど同じである〉。〈あがない〉とは捕虜や奴隷を解放するための身代金である。イエスは自分に罪が無いのに、罪ある私たちを解放するために身代わりとなって死なれた。それは主が私たちを愛してくださったからである。

結論

私たちは厳しい競争社会に生きている。いつも何かに駆り立てられて走り続け、優越感と劣等感に揺れる。そこに安息は無い。イエスは私たちをこの奴隷状態から解放してくださる。キリストの愛に満たされて、僕として仕える喜びを味わおう。

研究資料

(小平徳行)

18・1〜6に引き続いての地位論争。今回はイエスがご自身のエルサレムでの受難と復活を弟子たちに予告された後のことである。彼らはその意味を理解せず、彼の関心はもっぱら自分たちの地位にあった。

テキスト

20〜21 **ゼベダイの子らの母** ここでは母親がイエスに願っているが、他の福音書では本人たちが願ったように記されている(マルコ10・35)。

22 **あなたがたは** イエスに直接願ったのは母親であったが、ここではその2人の息子である弟子たちに語りかけている。母親の嘆願の背景には、弟子たち自身の意思があった。それゆえ、イエスは母親の問題としてではなく、弟子たちの問題として対応された。**わかっている** もし彼らが御国の本性を本当に理解しているなら、このような要求をするはずはないということ。**わたしの飲もうとしている杯** 間もなくイエスが経験される十字架の苦しみを指す。これを飲むとは、イエスのための苦しみに耐えることを意味する。「できます」と答え

た これはイエスの言葉に反射的に答えたもので、自分たちが将来直面するであろう事態を十分予測したうえで述べたものではない。

23 **確かに…飲むことになろう** イエスは、彼らの生涯を見通されて言った。実際、ヤコブは教会における最初の殉教者となり(使徒12・2)、ヨハネも晩年、厳しい迫害を受け、パトモス島に流刑となった(黙示録1・9)。わたしのすることではなく、わたしの父によって備えられている人々だけに許されること イエスは彼ら二人の大首席を約束されなかった。これは父なる神の主権のもとに決められることであり、イエスはご自分をあくまでも神の使命を果たすためのしもべの位置に置いておられた。

24 **十人の者は…憤慨した** 二人が願ったことは、他の十人の弟子たちにとっても大きな関心事であった。彼らの反応は、自分が他の人々より高い地位に就きたいという意識が全員に巢食っていた事を暴露するものであった。先にイエスは、幼な子のように自分を低くする者が御国では一番偉いと教えられたが(18・4)、弟子たちは何一つ学んでいなかった。

25 イエスは弟子たち全員の問題であるとは見抜き、改めて御国の支配原理を明らかにされる。治め これは「押さえつけ」(使徒19・16)と訳されているように、権力で治めることを意味する。偉い人たち 字義訳は「大きい人たち」で大きな権力をもっている人々、高い地位にある人々を指す。権力をふるっている 「権力をほしいままにする、暴政をしく」の意。

26 仕える人(ギ)ディアコノス 主人とその家族のために食卓で給仕する人のこと。イエスはこの言葉を一般的な意味に広げられ、主人の意向をくみながら忠実に働く人という意味で使われた。偉くなりたい 前節の「偉い人たち」と同じ語根。

27 かしら これは「第一になる」の意で、前節の「偉くなる」よりはるかに強い内容を指す。僕(ギ)ドゥーロス 字義訳は「奴隸」であり、これも前節の「仕える人」よりも強い表現である。本節は前節より強い表現を用いて、より深く謙遜になるようにとの思いが込められている。

28 ここまでイエスは弟子たちにどのような生き方をすべきかを教えてこられた。本節はそのクライマックス

で、メシヤとしての自らの到来の意味と目的を示すことにより、弟子たちが見習うべき模範を示された。仕えるため イエスの生活はまさに仕える歩みであった。イザヤ40・55章では「苦難のしもべ」の到来を預言している。そのしもべとはイエスご自身に他ならなかった。この奴隸の姿は十字架にかけられる前夜、最後の晩餐の席上で、手ぬぐいを取って、弟子たち一人一人の足を洗われたこと(ヨハネ13・4・5)に象徴され、その極限の姿は十字架の死により、ご自分の命を与えられたことによって表された。あがない(ギ)リュトロン 戦争の捕虜を釈放したり、奴隸を自由にする時に、それまでの所有者に対価として支払われたお金を指す。新改訳では「贖いの代価」、新共同訳では「身代金」。命(ギ)プシユケー これは生物学上の生命を意味するものとは異なり、肉体的、人格的なものすべてを含む言葉である。すべての人の贖いは、イエスの全存在が差し出されて完成したのである。

参考図書 中澤啓介『マタイの福音書註解(下)』、増田誉雄『マタイの福音書』『新聖書注解・新約1』(以上いのちのことば社)、他

聖書

タイトル

暗唱聖句

マタイ20・20～28
仕える生き方

人の子がきたのも、仕えられるためではなく、仕えるためであり、また多くの人のあがないとして、自分の命を与えるためである。
マタイ20・28
仕える生涯を送られた御子を覚え、仕える生き方をする。

目標

導入

(土屋開夫)

今の時期は、中学生や高校生のお兄さん、お姉さん達にとっては受験の大変な時期です。もしかしたら小学6年生の子たちの中にも、受験をしている子がいるかも知れません。

でも、ちょっと考えてみましょう。なぜ受験をするのでしょうか？ いい学校に入りたいから？ そしていい会社に入りたいから？ そして偉くなりたいから？

「偉い」って、どういう事でしょうね？ 今日はイエス様が「本当の偉さ」についてお話しされました。

何を求めているのか？

十二弟子の中のヤコブさんとヨハネさんは兄弟です。ある時、この二人のお母さんがイエス様のもとにひざまづいてお願いしました。簡単に言うと、「主よ、あなたが王様になられた時には、息子のヤコブを右の大臣、ヨハネを左の大臣にして下さい」と、お願いしたのです。自分の子どもには将来偉くなつて欲しい、立派になつて欲しい、有名になつて欲しいと思うお母さんの気持ちには、今も昔もいっしょです。最近是我が子を有名タレントにしようと、赤ちゃんの時からレッスンに通わせるお母さんもいるそうです。

でもイエス様は言われました、「あなたがたは、自分が何を求めているのか、わかつていない」(22)。

親なら我が子に素晴らしい人になつて欲しいと願います。みんなも素晴らしい人になりたいと思うでしょう。でも「本当に素晴らしい人」また「本当に偉い人」というのは、大臣になるとか、社長になるとか、人の上に立つ立場になるという事ではありません。大臣でも大統領でも、素晴らしくない人は幾らでもあります。ウソをつく人もいます。自分の事や自分の国の事ばかり考えて、他

の人の事を考えない人もいます。そんな事では、偉くも素晴らしくもありませんね。

本当に偉い人

父なる神様の目からご覧になった時、本当に偉い人、素晴らしい人とはどんな人でしょうか？ イエス様は言われました、「あなたがたの間でかしらになりたいと思う者は、僕とならねばならない」(27)。本当に偉い人になりたいと思うなら、自分のためではなく、誰かのために仕える人、誰かのために働く人、誰かのために与える人になりなさい、という意味だと思います。

そして続いてこう言われました、「それは、人の子がきたのも、仕えられるためではなく、仕えるためであり、また多くの人のあがないとして、自分の命を与えるためであるのと、ちょうど同じである」(28)。イエス様は神の御子です。言わば、神の王子様です。そのイエス様がこの世に降りてきて下さいました。それは私たち人間から仕えてもらったり、チャホヤしてもらったためでもなく、私たち人間を罪から、滅びから、地獄から救うために、自分の命を十字架の上で与えるために来て下さったので

す。あなたが救われるために、仕え、働き、命を与えて下さったのです。だからイエス様は一番偉い人、一番素晴らしい方です！

まとめ

あなたは将来どんな人になりたいですか？ お金をたくさん儲ける人？ 有名な歌手やスポーツ選手になる事？ それも悪くないけど、もし本当に偉い人、素晴らしい人になりたいと思うなら、どんな立場や職業についても、そこでイエス様のように、神様のため、そして人のために、仕える人、働く人、愛する人、どんなに小さなことでもいいから与えられる人になって下さいね！ そうしたら、イエス様が「偉いぞ！」とほめて下さるでしょう。

♪主は僕らを用いてくださる♪(PW59)

聖書 マタイ21・1～11 テーマ エルサレム入城

序論

(小泉 創)

十字架の前に、イエス・キリストがエルサレムに入場する場面です。キリストがどのようなお方かが描かれています。

一、ろばに乗る王

一昨年初来日した、「世界で最も貧しい大統領」であるウルグアイのムヒカ元大統領は今でも話題になっています。一国の大統領でありながら、古い車に乗り、小さな家に住む、清貧を重んじる素朴な姿が、世の中に衝撃を与えたのです。

しかし、イエス・キリストがエルサレムに入城したときの子ろばに乗る姿は、単なる清貧のあらわれではありませんでした。主が弟子たちに、近くの村からろばを連れてくるようにとお命じになったのは、馬が見当たらなかったからではないでしょう。つながれた親ろばと子ろばをご存じの主でしたら、必要とあれば馬のいる場所を

示すことも出来たはずですが、それでも主はろばを、それも親ろばではなく、あえて子ろばの方を望まれて、その背中に乗られたのです。

それはマタイが引用したゼカリヤ9・9にある来たるべき王、救い主の姿と重なります。その王は柔和で、ろばの子に乗られるお方です。ゼカリヤ書の続きは、「わたしはエフライムから戦車を断ち、エルサレムから軍馬を断つ」とあります。戦いに結び付いた強い馬ではなく、荷を運んだり、農作業に用いられ、ゆったりと進むろばに乗られる王。好戦的で敵をけちらして力で服従させる王ではなく、イエスは平和をつくられる王であることが明らかにしているのです。

二、王を迎える人々

おりしも過越の祭りが近づく中で、神の都エルサレムは大きな盛り上がりを見せました。子ろばに乗ってエルサレムに入城なさるイエスを人々は熱狂的に歓迎しました。王を迎えるときのように(列王下9・13)、着ていた上着を脱いで道に敷き、その上を主に通っていたのです。そして「ダビデの子にホサナ(お救いください、

栄光あれ！」と、喜びの声をあげました。

詩篇118・25～26からの引用のことばを叫ぶ人々には、救い主を通して、神が与えてくださった輝かしい勝利のわざが想像されていたことでしょう。待ちに待った王が来られた！ いよいよ私たちの願いが実現する！ 現実的な目の前の敵が滅ばされ、安寧が与えられるのだ、と。

三、王の戦い

人々はモーセを通してなされた救いのわざに思いをはせ、今新たに神がしてくださることへの期待がふくらんでいたのです。モーセがかつて約束した「わたしのようなひとりの預言者」(申命記18・15)がついに目の前にあらわれたのです。それならば、彼らはその言葉に聞き従わなければなりませんでした。しかし実際はどうだったでしょうか。

主がなそうとしておられる救いは人々の期待を上回るものでした。主は人々が望むようなローマや圧政からのユダヤの救いではなく、悪魔の支配、罪と死のおそれに縛り付けられて閉じ込められている全ての人を救い出すために来られたのです。

入城の際に喜んだ群衆の期待通りには、イエスはふるまいませんでした。ですから人々の期待は失望に変わり、反対する者たちの扇動的なねたみと憎しみの声に巻き込まれていきました。その週末に神の都は、待ち望んでいた王を十字架につけよとの声で満たされました。従うべき王を退け、十字架につけて殺してしまったのです。

しかし、そのような罪びとたちのためにこそ、柔和な王はすべてを手放し、悪と戦ってくださったのです。最もみじめな十字架を経て、復活によって輝かしい勝利をおさめられたのです。ここに神のなされることの不思議があります。そのような勝利こそ、どのような王もなしえない素晴らしい勝利に他なりませんでした。

結論

たとえ神のなされることと、私たちの期待していることとが異なっていたとしても、主のなされるわざの素晴らしさを忘れてはなりません。主ご自身が誰よりも柔和で、従順に歩まれました。私たちも柔和な主にどこまでもついていきましよう。

研究資料

(辻林和己)

マタイ福音書では21章から主イエスの生涯の最後の一週間が始まる。1～17節は「棕櫚の聖日」と言われる日曜日の出来事が記されている。今回の個所は「エルサレム入城」と呼ばれる個所である。この出来事は他の三福音書にも記されている(マルコ11・1～11、ルカ19・28～48、ヨハネ12・12～19)。

テキスト

1 **ベテパゲ** 「いちじくの家」の意。エルサレムの南西、オリーブ山のふもとにあった村。

2 **向こうの村** 「ベタニヤ」のことだと言われている。ろばがつかがれていて：見るであろう 主イエスが全知のお方であることを示している。

3 **主がお入り用なのです** ろばの主人より主イエスの方が真の意味でその所有者であることを表している。

4 **預言者** イザヤとゼカリヤのこと。

5 **シオンの娘に告げよ** この個所だけはイザヤ62・11の引用。「シオンの娘」はエルサレムの市民のこと。見

よ、… 以下はゼカリヤ9・9の引用。ゼカリヤ書の「彼は義なる者であつて勝利を得、」の個所は省かれている。**あなたの王がおいでになる** 原文は「あなたの王があなたの所に来られる」。真の王である救い主がエルサレムに来られる。**柔和なおかた** マタイ11・29参照。**くびきを負うろばの子** ゼカリヤ書では「ろばの子である子馬」。これが「くびきを負う…」に換えられて、救い主は、柔和なお方であり、軍馬や戦車でなく、平和の王としてろばの子に乗って来られる謙遜な方であることをマタイは強調している。マタイはゼカリヤ書を引用することによって、主イエスが、旧約聖書で預言された通りの救い主として来られたことを示している。

7 **ろばと子ろば** ろば(おそらく母ろば)と一緒に連れて来られたのは、まだ小さいろばの子が群衆の中を落ち着いて進むのに必要だったからかもしれない。

8 **群衆のうち多くの者は** 原文では「群衆(ギ)オクロス」の前に「多数の」の意味を持つ形容詞の最上級「ギ」プレイストス」が用いられている。それによって著者マタイはこのときの群衆の多さを強調している。新共同訳では「大勢の群衆は」。上着を道に敷き これは王を迎

えることを意味した(列王下9・13参照)。群衆は主イエスがエリコで盲人の目を開かれたり(マタイ20・29～34)、ベタニヤでラザロを蘇生させられたこと(ヨハネ12・17～18)を見聞きしていた。彼らは主イエスを王として認めたのである。木の枝 ヨハネ12・13では「しゅろの枝」。

9 **ダビデの子に、ホサナ：** 括弧内は詩篇118・25～26の引用。過越の祭りに集う人々は、この詩篇の個所を交唱しながら進んだ。「ホサナ」はアラム語で「私たちをお救いください」という意味。ここでは喜びや賛美の叫びとなっている。新約時代には「栄光あれ、祝福あれ」という意味で用いられている。主の御名によってきたる者

「きたる者」はマタイ11・3の「きたるべきかた」の原語と同じ言葉(ギリシア・エルコメノス)が用いられている。ここでは、救い主(メシヤ)の称号のように用いられている。いと高き所に 「天におられる神に」の意。

10 **町中がこぞって騒ぎ立ち** 主イエスのエルサレム入城は、町中の人々に、驚き、不安、期待、疑惑、怒り等様々な感情を引き起こした。

11 この人はガリラヤのナザレから出た預言者イエスである 人々の質問に、今まで賛美の声を上げていた群衆

がこのように答えた。「預言者(ギリシア・プロフェーテース)」は「あの有名な預言者」という意味が込められている。そしてモーセが言った「わたしのようになひとりの預言者」(申命記18・15)はこのお方(主イエス)である、という意味を込めて語っていると理解することもできる。「ガリラヤのナザレから出た」という表現には、ガリラヤから来た群衆(巡礼者)が誇らしげに、主イエスが自分たちの地方の出身だと言っている様子が伺われる。

真の王、平和の主イエスは、救い主を待ち望んでいたユダヤの民だけでなく、私のもとにも来て下さった。山室軍平は、「イエスは靈魂(たましい)の世界の王である」と言っている(「マタイ伝」『民衆の聖書』)。

参考図書 増田誉雄「マタイの福音書」『新聖書注解』(いのちのことば社)、内田和彦「マタイの福音書」『新実用聖書注解』(いのちのことば社) 他

聖書

マタイ21・1～11

タイトル

王であるイエス様を心に迎えよう！

暗唱聖句

見よ、あなたの王がおいでになる、柔和なおかたで、ろばに乗って。

マタイ21・5

目標

柔和な王として来られたキリストを受け入れ、従う者となる。

導入

(飯田勝彦)

2月14日からイエス様の苦しみを覚えて祈るレントに入っています。皆さん学校や宿題、塾などで忙しいと思いますが、少しでもイエス様のことを覚えて祈りましょう。皆さんのお母さんは、苦しい思いしながら皆さんを産んでくれました。今、皆さんがこうして過ごせているのはお母さんの苦しみがあつてこそです。

それと同じようにイエス様も皆さんが幸せに過ごせるように苦しい道を行んでくださいました。

エルサレムへ入城されるイエス様

今日の箇所は、イエス様がろばに乗ってエルサレムへ入城されたことを書かれてあります。エルサレムはキリ

スト教の聖地です。今でも多くの人々が観光でエルサレムへ訪れています。イエス様も観光だったのでしょうか？いいえ、違います。イエス様にとってエルサレムは決してワクワクするような場所ではありませんでした。なぜなら、イエス様はエルサレムで多くの人から苦しめられ、十字架につけられて殺されることを知っておられたからです。

今日の聖書箇所の前にはイエス様ご自分で、エルサレムで苦しめられて殺されることを話しておられます。ではどうしてイエス様は殺されてしまうようなエルサレムへ行かれたのでしょうか。それは、私たちに救いを与えるためです。

イエス様は私たちが救われるために、エルサレムへ行くことから逃げないで顔をしっかりとエルサレムへ向けて進んで行かれました。

み言葉を成就されるイエス様

イエス様はろばに乗ってエルサレムへ入城されましたが、それは約700年前の預言者イザヤによって語られていたことでした。しかも、子ろばに乗るといふ具体的なことまで預言されていたのです。イエス様によってこの預

言は成就しました。

イエス様の人生は、旧約聖書に語られたみ言葉の成就でした。それは、神の壮大なご計画、私たちが救われるための計画を実現するためにイエス様は来られたからです。イエス様はこの地上で自分のやりたいことをされたのではなく、神さまのみ言葉が成就することだけを喜びとして歩まれました。そこには多くの戦いと苦しみがあったのです。それはすべて私たちが救われるためでした。

王として迎えられるイエス様

イエス様は、全人類を救う王としてこの地上に来られました。皆さんはアメリカの大統領が日本に来たときの映像を見たことがあるでしょうか。移動のときには頑丈でしかも高級な車に乗り、周りには多くの警備車両がついています。まさにVIP（ベリー・インポートtant・パーソン＝重要人物）対応です。

しかし、王であるイエス様はどうでしょうか。イエス様が乗られたのは高級車ですか？ いいえ、子ろばです。他の聖書箇所を見るとその子ろばは「まだだれも乗ったことのないろばの子」（マルコ11・2）と記されています。

イエス様はそのような頼りにならない子ろばに乗られるほどまでに謙遜で、柔和な王としてエルサレムへ入城されました。人々は「ホサナ！（どうぞ救ってください）」と叫び、イエス様を歓迎しました。しかし、後で彼らはイエス様に対して「十字架につけろ！」と叫び、イエス様の処刑に賛成したのです。それは、彼らがイエス様をこの世の王と同じように考えていたので、強い王ではなく捕らえられ、鞭うたれるイエス様の姿につまずいてしまったのです。

まとめ

皆さんは、イエス様をどのような王として迎えていますか？ イエス様は、神であられるのに人となられ私たちに仕えるほどまでに柔和なお方です。

イエス様を心に迎えるとき、私たちの心の中で柔和なイエス様が王となってくださいます。このイエス様を迎えるなら、争いではなく、平和をつくりだす者に変えて下されます。柔和な王であられるイエス様を救い主として心に迎えましょう。

♪さあ イエスさまを信じましょう♪（ホ60、ふ1）

聖書 マタイ22・34〜40 テーマ 一番大切な戒め

序論

(石田高保)

律法学者の言う「すべてのいましめ」とは、十戒を土台とする旧約の律法のことです。613箇条ありました。その中でどれが一番大切かと聞かれて、主は二つのいましめを挙げています。それは神を愛することと、人を愛すること。二つあるようですが、実際はコインの表と裏で切り離すことができません。神を愛するとは、人を愛することであり、人を愛することによって、神を愛する度合いが計られます。十戒を見ると、前半は神への態度を規定したもので、いわば神を愛すること。後半は人への態度で、いわば人を愛することになっています。ですからキリスト教、クリスチャンの信仰生活とは「神と人とを愛する道」と言えるでしょう。

一、神を愛すること

そもそも神に愛されていることが身に浸みてこそ、神を愛することができるというものです。「わたしたちが神を愛したのではなく、神がわたしたちを愛して下さって」(イヨハネ4・10)。私たちはほんらい神を愛する愛を持ち合

わせてはいません。それは原罪を受け継いでいるために、生まれながらの人間には無理な注文です。多くの人は、自分を愛してお造りになった神を愛するどころか、神を認めず、度外視して生きています。とても「神よ、あなたを愛します」などと言えないでしょう。神が私たちを愛して下さったとは、「わたしたちの罪のためにあがないの供え物として御子をおつかわしになった」(イヨハネ4・10)、ここに本物の愛があります。

二、人を愛すること

人を愛することは、神を愛することと密着していて切り離せません。これは神を愛することから生まれます。「わたしたちが愛し合うのは、神がまずわたしたちを愛して下さったからである」(イヨハネ4・19)。私たちがほんらい神を愛する愛を持ち合わせていないのと同様に、身近な人を愛する愛も持ち合わせてはいません。人間の愛は、相手が可愛いから、愛すべきだから、自分によくしてくれるから、また良くして貰いたいから愛するという動機が潜んでいるものです。どんなに努力しても、人間の愛には限界があります。

そのような人間ですが、主の十字架をとおして神から愛

されていることがわかって、神を愛するようになり、今度は隣人を愛したいと願うように造りかえられます。それでも愛せない人を愛して行くためには神の恵みが要ります。愛すべき人でも自分の敵に回って愛しくなくなることもあります。それでも愛して行くためには、十字架で自己中心性を砕いていただき、聖霊に満たしていただいて、神の愛を注いでいただきます。そのとき、敵を愛し、迫害する者のために祈る自分を発見します。

これは神を愛していることを裏付けることになります。〈自分を愛するようにあなたの隣り人を愛せよ〉とは具体的にどういうことでしょうか。まず家族、友人、知人、職場の人、地域の人の祝福を祈ること。身近な関係、難しい関係の人こそ、さばかないで祝福を祈るのです。あの人を変えて下さいではなく、この私を変えて下さいと祈りましょう。その人に自分から交わりを求めましょう。自分の方から親しくなるため出て行くのです。その人の必要に応えましょう。話を聞いてあげる、困っているときに助ける、悲しんでいるときに寄り添う、など。〈自分を愛するようにあなたの隣り人を愛〉することは黄金律につながります。「何事でも人々からして欲しいと望むことは、人々にもそ

のとおりにせよ」(マタイ7・12)。その上で、福音を伝えましょう。チャンスをつかまえて、自分の体験談を話したり、他の人の証しをしましょう。普段の地道な仕える働きが、相手の心を開き、救いに導かれやすくなります。隣人を愛することが、自然と伝道につながるのです。私たちの隣人は、まず愛の対象です。伝道の対象として見ると、こちらも肩肘が張り、相手も身構えてしまうでしょう。初めに隣人愛あります。

結論

神と人とを愛する道、この生き方は意外にも、「とてもそんな立派な生き方はできません」と告白するところから始まります。頭で理解したからといって、神と人を愛することができるわけではありません。事実この律法学者は「あなたは神の国から遠くない」(マルコ12・34)と言われています。主はこう言おうとしておられるのではないのでしょうか。「あなたに足りないことがある、もう一步踏み切りなさい。それは私を信じて、身を任せて、従うことだ」。聖霊に満たされて神の愛を注いでいただきます。そしてあなたの隣人の祝福を祈りましょう。その人に仕えてその必要に応えましょう。

研究資料

(小平徳行)

この箇所は受難週の火曜日、神殿において、イエスとユダヤ人の宗教的指導者たちとのあいだで繰り広げられた論争(21・23～23・39)の一つである。

テキスト

34 このイエスの教えはパリサイ人、サドカイ人との一連の論争の中でなされたものである。言いこめられた(ギ)エピモーセン) 言うべき言葉を失い、何を話してよいかわからなくなった状態を言う。

35 イエスをためそうとして 律法の専門家がこのような質問をしたのは、真理を追究するためではなく、イエスの評判を落とすためであった。イエスがある戒めを軽視しているように見えたため、この点を問い詰めることによって、イエスを非難できると考えたのである。

36 律法の中で これは十戒に限定せず、モーセ律法全体を指したものである。ユダヤ教のラビたちはモーセの律法を細分化し、成すべき命令が248、禁止命令が365、合計613の戒めがあると教えていた。そのすべての命令の中でどれが一番大切なかと尋ねた。これは学問的にも実

際的にも重要な問いであった。どのいましめがいちばん大切なのでしょう。これは直訳すると「どれが大きな戒めですか」となる。「大きな」を意味する(ギ)メガレーは、程度、階級について用いられる時、最上級の意を表わし、「いちばん大切な」という意味になる。

37～38 『心をつくし、…主なるあなたの神を愛せよ』

これは申命記6・5の引用で、「シエマ(聞け)」と呼ばれており、ユダヤ人が礼拝のたびに唱えるもので、一日に数回は復唱することを義務付けられている。心をつくし 「あなたの心全体で」の意。「精神」は魂、「思い」は理性を意味し、心、精神、思いは重なり合っている。これらの言葉を用いて、人間の全存在について言及している。愛せよ(ギ)アガペーセイス) これは神の愛に使われる。無償で自らをささげていく愛である。神を崇めることを何より先にし、神の聖なる意志に服することを何より大事にすることである。神を愛するとは、その戒めに従うことである。しかもそれは義務感で行なうのではなく、神を喜ばせたい一心であるものであるから、難しいものではない(1ヨハネ5・3)。シエマは唯一の神に対する全面的、全人格的愛を教えている。これはユダ

ヤ人であれば最も大切な教えとして幼い時から唱え続けてきたものであるため、イエスの答えを否定する者はいなかった。

39 第二もこれと同様である 律法学者が尋ねたのは一番大切な戒めについてのみであつたが、イエスは第二の戒めも同等に重要である事を述べた。神に対する態度と人に対する態度は切り離すことはできない。イエスはこの第二の戒めを守らない限り、第一の戒めを守っていることにはならないと考えておられた（Ⅰヨハネ4・20（21参照）。パリサイ人たちは神に対して熱心であると自負し、自分たちだけで分離派として一派を構え、権力者に対しては野党的存在となり、一般大衆に対しては、彼らを「アム・ハーアーレツ（土民、無学の衆）」と呼んで見下げていた。シエマによつて自分たちを正当化しているパリサイ人たちに向かつてイエスは、隣人を愛することも同様に重要であると言われたのである。『自分を愛するようにあなたの隣り人を愛せよ』これはレビ19・18の引用である。あなたの隣り人 旧約においては仲間のイスラエル人やイスラエルの地に寄留している外国人を指している（レビ19・18）。しかしイエスはこれを

「あなたを必要としている人」（ルカ10・29（37）、「あなたに敵対している人」（マタイ5・43（44）にまで広げ、どのような人も隣人から排除されなかった。自分を愛するように：愛せよ 自分を愛することを当然のこととしている。「愛せよ」は37節同様、神の愛を表現する時に使う言葉が用いられている。愛は神の本性である。

40 律法全体と預言者 これは旧約聖書全体のこと。イエスはこの二つの戒めの中に神の全ての律法が含まれると見なされた。そしてこの愛に生きることが、律法主義からの解放であり、律法の完成といえるのである。イエスはこのことを他のところでも教え（マタイ7・12）、パウロも同様に教えている（ローマ13・8（10）、ガラテヤ5・14）。さらには、愛がなければいっさいは無益だと教えており、愛を追求めよと命じている（Ⅰコリント13・1（14・1））。

クリスチャンの生涯は、キリストの愛に応答し、内住のキリストにより、愛を動機として歩み、愛に成長し、愛に完成されていくものである。これがキリストに似た者とされることであり、真のホーリネスである。

参考図書 2月18日分と同じ。

聖書

マタイ22・34〜40

タイトル
暗唱聖句

神様を愛し、隣人を愛しましょう。
心をつくし、精神をつくし、思いをつくして、主なるあなたの神を愛せよ。

目 標

一番大切なこととして、神を愛し、隣人を愛する生き方をする。

マタイ22・37

導入

(飯田勝彦)

今、皆さんが住んでいる家は木造ですか？ 国の重要文化財などに立派な木造の建物があります。木造の家には、沢山の柱がありますが、その中で一番大切な柱を何というか知っていますか？ それは「大黒柱」です。大黒柱は、建物を支えるとても大事な柱です。それが倒れると、建物全体が崩れてしまうほどです。

律法学者たちがイエス様に「先生、律法の中で、どのいましめが一番大切ですか？」と尋ねました。するとイエス様が答えられました。

全力で神様を愛するということです

イエス様は大切な第一のいましめは「心をつくし、精

神をつくし、思いをつくして、主なるあなたの神を愛せよ」であると言われました。

一言でいうと「全力で神様を愛しなさい」ということです。では、具体的に言うとはどんなことでしょうか。考えてみましょう。

例えば皆さんが、学校の体育の授業で50メートルを走ったことがあるでしょう。先のゴールをしっかりと見つけて、全力で手を振り、足を上げてゴールするまで力いっぱい走り続けるでしょう。そのような感じで神様を愛することを、神様はあなたに願っておられるのです。神様は、あなたがどこにいても、何をやっていても、どのような時でも神様を愛することを望んでいます。

それほどまで、神様はあなたと愛し合う関係を求めておられるのです。神様が私たち人間をお造りになった目的は、互いに愛し合うためでした。私たちは、神様から愛される体験をして初めて心が安らかになります。そして、私たちも神様を全力で愛して初めて幸せになれるのです。

実は、私たちが神様を全力で愛する前から、神様の力が私たちを全力で愛してくださいました。神様は全力の

愛を言葉だけで終わりにされませんでした。全力の愛で、行動をもって示してくださいましたのです。それがイエス・キリストの十字架です。神様は、罪の中で苦しむ私たちを、助けたいと願われました。そして、愛する御子イエス・キリストを十字架にかけて死に渡されたのです。聖書に「神はそのひとり子を賜ったほどに、この世を愛して下さった。それは御子を信じる者がひとりも滅びないで、永遠の命を得るためである」(ヨハネ3・16)とあります。

神様の全力の愛を体験した人は、神様を全力で愛する人に変えられます。神様はあなたの全力の愛を喜んで受け入れてくださいます。

自分を愛するように隣人を愛することです

イエス様は続けて「自分を愛するように隣人を愛しなさい」と言われました。これも第一のいましめと同じように大切なことでした。隣人とは誰のことでしょうか？ 家族や友だち、学校の先生、地域の人たちです。

皆さんは互いに憎み合い、傷つけ合うことより愛し合うことを願うでしょう。隣人を愛するには、まず自分を愛することが欠かせません。人を赦せず憎んだり、相手

を批判したりすることは、相手を傷つけるだけでなく、実は自分も傷つけることになります。それは、決して自分を愛していることにはなりません。自分を愛せない人と、隣人を愛することが難しいのです。ですから、まず私たちが愛してやまない神様の愛を頂くことが必要です。神様の愛が分かると自分を愛することができるのです。そして、その愛が隣人に流れて行くのです。

隣人を愛するとは、隣人の幸せを祈ることです。祈っていると思議ですが、神様が隣りに積極的に関わっていく力を与えてくださいます。皆さんの周りには、寂しい思いをしている人や「愛されたい」と思っている人がたくさんいます。神様は、あなたを用いて神様の素晴らしき愛を届けようとしておられます。

まとめ

イエス様が言われた大切ないましめを守るならば、神様が喜ばれるだけではなく、私たちも喜びと幸せに満たされます。神様を愛し、自分を愛し、隣人を愛する恵みを体験して過ごしましょう。

♪あいをください♪(ホ78、イン67)

聖書 マタイ26・26～29 テーマ 契約の血

序論

(石田高保)

よく知られた聖餐制定の場面です。いわゆる過越の食事の最中、イエス様は今日に続く「主の聖餐」を定められました。出エジプトを記念する過越の食事から、種入れぬパンとぶどう酒だけを取り上げて、「わたしを記念するため、このように行いなさい」(1コリント11・24)とクリスチャンの共同体が繰り返すように命じられました。それとおして「わたしの契約の血である」と言われたキリストとの新しい契約を確認するためです。ではその内容は何かでしょうか。

一、神の命にあずかる契約

主はひとつのパンを手にとって祝福して裂き、弟子たちに与えて言われます、「これはわたしのからだである」と。これには伏線があります。五千人の給食のあと、「わたしは天から下ってきた生きたパンである…わたしと与えるパンは、世の命のために与えるわたしの肉である」(ヨハネ6・51)、「わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者には、永

遠の命があり」(同6・54)。つまり主はご自分の肉と血を食べて生きるようにと私たちを招いておられます。人間はもともと、言うならば神を食料とし、あるいは燃料として生きるように設計されています。ここで言う肉と血は、もちろん文字どおりではなく、イエス様との生き生きとした関係のことです。教会はキリストのからだですから、私たちが意識しなくてもイエス様とつながっています。その上でその肉を食べ、血を飲む、つまり意識的に主につながり続けるという信仰の営みを、聖餐は助けるのです。「主は私のうちにおられる」と告白するだけではなく、聖別されたパンを食べ、ぶどう酒を飲むことによって、知性だけでなく視覚や触覚、味覚によっても主の臨在を確認できるわけです。イエス様は見る、さわる、食べる、飲むという感覚的な営みによっても信仰を働かせられるように備えて下さいました。それは洗礼も同様ですが、身体的行為によっても神はご自分の命を私たちに注いでくださいます。神は霊的行為のために、パンやぶどう酒といった物質的なものを用いなくさいます。そして聖餐によって私たちはイエス様と合一し、一体であることを理屈抜きで体感することが出来ます。聖餐は教会に一致をもたらします。教会の仲間と神

の家族意識、キリストのからだ意識を共有することができ
ます。そこから聖霊によって互いに仕え合い、与えあい、
支え合うという愛のわざに立ち上がりましょう。

二、神の赦しにあずかる契約

〈これは、罪のゆるしを得させるようにと、多くの人の
ために流すわたしの契約の血である〉と言われているから
といって、聖餐のぶどう酒がイエス様の血そのものではあ
りません。しかし主がこのぶどう酒はわたしの血であると
宣言しておられる以上、それを信仰によってイエス様の血
として飲むとき、私たちの内には聖霊によって神の恵みの
わざが起こされます。それは罪の赦しかもしれない、自我
の死の確信かもしれない、いやしのわざかもしれない、栄
光の望みかもしれない。とにかく儀式以上のことが起きる
と期待すべきです。また聖餐に同席している求道者の内
にも、主の臨在が明らかになることを信じたい。

では契約の血とはどういう意味でしょうか。それは神が
イスラエルと結ばれた古い契約に代わって、イエス様がご
自身に従う者と結ぼうとする新しい契約のことです。それ
は十字架で流された血によって完全なものとなりました。
「供え物やいけにえはささげられるが、儀式にたずさわる

者の良心を全うすることはできない」(ヘブル9・9)とあ
るとおり、旧約時代の動物犠牲による罪の贖いは、結局、
良心のとがめを取り除くことはできませんでした。しかし
「キリストの血は、なおさら、わたしたちの良心をきよめて
死んだわざを取り除き」(同9・14)とあるように、主が十
字架で流された血は、二度と蒸し返されることがないほど
完全に罪を取り除くことができるようになりました。その
いけにえの違いを顕著に証しているのがバプテスマのヨ
ハネです。彼はイエス様を指さして「見よ、世の罪を取り
除く神の小羊」(ヨハネ2・29)と言い放ち、イエス様こそ
究極のいけにえであり、贖いを完成する方であると看破し
ました。ですから私たちが聖餐に与る(あずかる)ことによって、キ
リストの血による新しい契約を確認し、信仰を新たにす
ることができるのです。いわば新しい契約に押された実印
は、イエス様の血です。

結論

聖餐は洗礼と共に「見える神の言葉」と言われ、神の命
と真理を理屈抜きでわからせるために定められたもので
す。これに与る機会を意義深く用いましょう。

研究資料

(小平徳行)

最後の晩餐と言われる、過越の食事の場面である。イエスは十字架への受難の道を歩まれる。ここで聖餐の制定がなされた。イエスはパンとぶどう酒を弟子たちに配られ、それに新しい意味を付与された。パンは十字架上で裂かれるイエス自身のからだ、ぶどう酒は、十字架上で流される血を表す。イエス以降の代々の教会は、この食事を主の聖餐式として守り続けている。

テキスト

26 一同が食事をしているとき これは過越の食事である。イエスはパンを取り このパンは過越の食事の種なしパンである(出エジプト12・15、13・3、7、申命記16・3)。パウロは教会から古いパン種を取り除くようにと警告しており、パン種を「誇り、悪意、邪悪」を象徴するものとして言及している(1コリント5・6～8)。なお、聖餐式においては東方教会では常に、西方教会でも798年までは種なしパンにこだわることはなかった。祝福して パンを祝福したのではなく、神をほめたたえたという意味。食事の時にささげられる定型的な祝福の祈

りのことかもしれない。新共同訳聖書では「賛美の祈りを唱えて」となっている。これをさき イエスが一つのパンを裂かれたことを強調している。取って食べよ 弟子の一人一人が主體的に、この主の晩餐に深く関わることを示唆している。パンを備えられるのはイエスである。しかし、このイエスの契約が、私たちに真に有効なものになるには、一人一人が自らの意思に基づいて、パンを取る必要がある。イスラエルの民は、それぞれが出エジプトを経験する者として過越の食事にあずかった。それと同様に、御国の民の一人一人は、イエスによる罪の贖いにあずかる者としてパンを取るのである。これはわたしのからだである 裂かれたパンはイエスのからだを象徴し、十字架の死を表わしている。この句は教会史上激しく論争されてきた。パンはキリストのからだそのものである、キリストはパンと共におられる、パンはキリストの象徴である、パンはキリストを記念するものである、など様々な解釈がある。本来、聖餐は教会の一致を表すシンボルとなるはずのものであるが、神学の論争課題になってしまっている。

27 杯を取り 通常、杯は「苦悩、死、裁き」などを象

徴する。ここで単数形が用いられているのは、弟子たちがイエスの契約にあずかる一つの共同体であることを示唆している。**感謝して** 前節の「祝福して」とほぼ同義。過越の食事の際に唱えられた公式の感謝の祈りを指すと考えられる。**みな、この杯から飲め** イエスはご自分の弟子たちに対し、みな同じ杯から飲むように命じた。この杯にあずかることは、イエスの共同体の一員であることを示す。

28 わたしの契約の血 イエスご自身が契約を締結させるために流された血という意味。主なる神がイスラエルと結ばれた古い契約は、民が神の命令に従わなかったために破棄されてしまったゆえ、神は預言者エレミヤを通して、やがて神はイスラエルの民と新しい契約を結ぶと語られた(エレミヤ31:31-34)。この預言の成就として、イエスは御国の民と新しい契約をご自身の血によって結ばれたのである(ヘブル8:6-13)。この新しい契約において、主の聖餐が過越の食事につけて代えられたのである。**罪のゆるしを得させるように** イエスはご自身の血が罪を赦すために流されるものと解説された。罪の赦しのために血が流されることが必要であることはモーセ

律法以来、説かれ続けてきた。神殿において多くの動物の犠牲の血が流され続けてきたのは、みな罪の赦しのためであった。しかし、イエスはご自身の血がそれに取って代えられたと宣言されたのである。それはただ一度だけ流され、永遠の贖いを全うするものであった(ヘブル9:12)。**多くの人** セムの表現で包括的な意味をもち、すべての人の意。**流す** 現在分詞形が使われており、イエスの赦しがいづの時代にも有効であることを表している。過越の食事の際にはパンと飲み物について、出エジプトに関する説明がなされてきた。同じように、ここではイエスがパンとぶどう酒について、十字架による贖いの契約の意味があることを説明している。

29 その日まで 終末の御国における宴会が催される日まで(黙示録19:6-8)。御国の民は、その時までイエスの贖いの死を覚え続けるために聖餐式を守り続ける。聖餐式は、過去になされたイエスの贖いのわざを振り返る時であると同時に、未来に約束されているイエスとのすばらしい宴席を待望する時でもある。そして今ここに臨在されるイエスを仰ぐ時である。

参考図書 2月18日分と同じ。

聖書

マタイ26・26～29

タイトル

永遠に変わらない約束！

暗唱聖句

これは、罪のゆるしを得させるようにと、

多くの人のために流すわたしの契約の血である。

マタイ26・28

目標

契約の血として流されたキリストの血を覚え、罪のゆるしを受け取る。

導入

(松浦みち子)

日本は世界で唯一の原子爆弾が投下された国です。多くの人の命が奪われ、そのようなことが二度と起こらないようにと「非核三原則」の約束がなされた国です。「核兵器をもたず、つくらず、もちこまない」という約束は70年経った今揺れ動いています。人間の約束はどんなに素晴らしいものでも、悲しい現実ですが、揺らぎが起きてきます。皆さんの人生に絶対ゆるぎない約束はあるのでしょうか。あります！ そのことを今日はしっかりと学びましょう。

最後の晩餐

皆さんはこの絵を見たことがありますか？（レオナル

ド・ダ・ヴィンチの「最後の晩餐」の絵を用意して見せるとよい）。これはイエス様が十字架にかけられる前日の弟子たちとの最後の食事の場面を描いたものです。イエス様と弟子たちは、エルサレムで過越の祭りを祝って食事をしました。その食事の中で、イエス様が突然「あなたがたのなかの一人がわたしを裏切ります」とおっしゃいました。この思わぬ言葉に、食事を楽しんでいた弟子たちの手がピタッととまり、えっ！と驚きました。そして「イエス様、まさかわたしのことではないでしょうね」と弟子たちは口々に尋ねました。するとイエス様は「たしかにわたしは聖書に書いてあるとおりに去って行く。しかし、わたしを裏切るその人はわざわいだ。その人は生まれなかった方が、よかったであろう」と言われました。すると、弟子のイスカリオテのユダが平然と「先生、まさかわたしではないでしょうね」と言うと、彼を見つめながら「いや、あなただ！」と言われました。

契約の血

イエス様はそれから不思議なことを始められました。食卓に並べてあったパンを取り上げ、祝福の祈りをされ、弟子たちにパンを裂いて与えられ、「取って食べよ。

これはわたしのからだである」また、杯を取り、感謝の祈りをされ、彼らに与えて「みな、この杯から飲め。これは、罪のゆるしを得させるようにと、多くの人のために流すわたしの契約の血である」とおっしゃいました。そして「今後決して、ぶどうの実から造ったものを飲むことをしない」と宣言されました。弟子たちは、これからどんなことが起こるのか誰も知りませんでした。でも、イエス様はすべて知っておられ、この最後の時、弟子たちを心から祝福されたのです。

聖餐式

これがイエス様の地上での最後の食事の出来事です。ルカによる福音書では22・19で、イエス様がパンを裂いて弟子たちに与えられるとき、「これは、あなたがたのために与えるわたしのからだである。わたしを記念するため、このように行いなさい」と言っておられます。ですから、今でも世界中の教会がイエス様の「命令」を守り、この最後の夜にイエス様がなさったようにパンとぶどう酒、またはぶどうジュースを飲むのです。これが聖餐式です。

では、聖餐式は私たちにとってどのような意味がある

のかを考えてみましょう。イエス様はご自分が裂いたパンを「これは、わたしのからだである」とおっしゃいました。このパンは、十字架につけられ、釘で裂かれるイエス様の体を表わしています。また、ぶどう酒を取って「これは、あなたがたのために流す契約の血である」とおっしゃいました。このぶどう酒は、すべての人の罪をゆるすために十字架の上で流されるイエス様の血を表わしています。

聖餐式は、イエス・キリストの十字架による新しい契約が結ばれていることを確認し、私たち一人ひとりがその信仰を告白するものです。そして、イエス様を信じて洗礼を受けたクリスチャン一人ひとりが、十字架の血による救いをいただいたことを感謝し、主が再びこの地上にお出でになる時まで、多くの人に救いを告げ広める使命があることを確認する時なのです。

あなたも、イエス様があなたのために十字架にかかり身代わりとなって死んで下さったことを信じ神の子どもになりましょう。そして、聖餐式の恵みにあずかり、イエス様の光を輝かす人になっていきましょう。

♪ゆるすためです♪(ホ58、イン25)

聖書 マタイ26・36〜46 テーマ 決断の時の祈り

序論

(福井文彦)

イエスは、罪の身代わりの十字架の刑罰が、いかに苦しいものであるかをご存じでした。イエスはこのような刑罰を受けなくてすむ道と、父なる神のみこころに服従して刑罰を受ける道を知っておられました。その十字架を前にして祈られたのがこのゲツセマネの祈りです。そのため、この相反する二つの願いの間に板ばさみになってもだえ苦しめました。しかし、苦闘の末、自分の思いではなく、神のみこころに従われたのです。

一、苦しみの伴う祈り

福音書には、イエスの祈りの姿が多く記されています。私たちは、その祈りの姿から、主の大きな御業はこの祈りによって支えられていることを知ります。しかし、これまでのイエスの祈りとゲツセマネの祈りとは、ずいぶん違っています。

まず、この祈りの壮絶さに気づかされます。これまでにない祈りです。「静けき祈りの時はいと楽し」(新聖歌

190)とあります。本来、祈りには楽しい部分があります。しかし、ゲツセマネの祈りは全く違っていました。苦しみの伴う祈りでした。それは二つの語句に示されています。

一つは、イエスは「わたしは悲しみのあまり死ぬほどである」と語っておられます。ルカでは「イエスは苦しみもだえて、ますます切に祈られた。そして、その汗が血のしたたりのように地に落ちた」(ルカ22・44)とあります。これは死を恐れられたことを表しています。

もう一つは、「この杯をわたしから取りのけてください」(ルカ22・42)です。「杯」はこの場合、神の裁きを現しています(詩篇75・7〜8)。ここでは裁きを受けるイエスが、この杯を取り去ってくださいと祈られたのです。

二、十字架の苦しみ

なぜ、イエスはこれほどまでに「わたしは悲しみのあまり死ぬほどである」と言って死を恐れられたのでしょうか。それはイエスが、これから起こる十字架の出来事がどのようなものであるかよく知っておられたからです。全世界の罪を一身に負い、世の罪を取り除く神の小

羊として十字架にかけられるのです。その結果、父なる神との交わりの断絶を経験したことのないお方が、神の怒りを受け、捨てられ、絶たれるからです。ほかのどれも味わったことのない苦しみです。

初代教会のクリスチャンたちは喜んで殉教の死を遂げました。しかし、イエスは何の罪もないにもかかわらず（Ⅱコリント5・21）、罪そのものとなって、十字架上で裁かれ、苦しみもだえ、死んでくださったのです。

ですから、イエスが死を恐れられたのは、イエスの勇気の欠乏によるのではなく、十字架の苦痛の特別の意味の深さを良く知っておられたからなのです。そのため、苦しみもだえ、血のしたたりのように大粒の汗を流して、切々と祈られたのです。

三、神のみこころへの従順

イエスは十字架の苦しみを前にして、〈わが父よ、もしできることでしたらどうか、この杯をわたしから過ぎ去らせてください。しかし、わたしの思いのままにはなく、みこころのままになさって下さい〉と祈られました。私たちが祈りの中で、神への願いを言い表わすことは悪いことではありません。しかし、それは祈りの一面です。

それよりもっと大切なことは、祈りによって父なる神のみこころを知り、自分の意志を神に明け渡していくことです。イエスはゲツセマネの祈りにおいて、命をかけて、神に従うか否かを問われたのです。

イエスは神に従うなら、神に捨てられ、断絶される苦しみを経験しなければなりません。しかし、イエスは苦しみを通して従順を学ばれたのです（ヘブル5・8）。その結果、神のみこころに従うイエスの決意が、サタンに勝利しました。

それで、人類のあがないのために十字架の道を選ぶかと問われたときに、「はい、従います」とお応えになりました。イエスの十字架における勝利は、このようにして与えられたのです。

結論

イエスは、ご自分が祈っているとき、眠っていた弟子に、〈誘惑に陥らないように、目をさまして祈っていないさ〉と勧められました。自分の願いを祈りつつ、どのようなときも、神のみこころがなされるようにと祈りたいものです。

研究資料

(宮澤清志)

テキスト

36 一緒に マタイのゲッセマネの祈りの記事の中で、他の並行記事と比較して目を引く表現の一つに、一緒に(ギ)メタ」という表現が多く見られることが挙げられる(36、38、40)。マタイは終始一貫インマヌエルの神を描いている(1・23、28・20他)が、ここでも同じである。しかし、この章での文脈においては、これから遺される弟子たちに対する愛の配慮の意味も併せ持っている。ゲッセマネ 「油しぼり」の意。ゲッセマネの「園」と言われているが、実際に美しい庭園があるわけではなく、オリブ山一画にある多くのオリブの木が茂っていたところ。オリブの実がたくさん採れると、そのオリブの実から油を搾るために人々が集まってきて働いた場所であることから、この名が付いたという説がある。キリストの受難物語の中で、このゲッセマネの名を明記しているのはマタイとマルコのみである。

37 ペテロとゼベダイの子ふたり ゼベダイの子ふたりとは、ヤコブとヨハネ。彼ら三人は、しばしばイエスの

みそば近くに同伴されるという特権に与^{あずか}っている(マタイ17・1、マルコ5・37)。

38 目をさましていなさい マタイによるゲッセマネの祈りの鍵となる言葉の一つ。40節にも繰り返して語られる。キリスト者には、イエスと共に見張りの役につくことが求められる。その時に座り込んでいてはならない。

39 うつぶしになり ユダヤ人は立つて祈る習慣があった(ルカ18・13)。しかし、ひざまずいて祈ることは、キリスト者の祈りの姿勢として定着していた(使徒7・60、9・40他)。これは、謙遜^{けんそん}と祈りの切実さを示すだけでなく、この個所では「退き」と同様に、「別れて祈る」という側面も併せ持った祈りである(使徒20・36、21・5)。この杯 しばしば、旧約聖書では神の祝福(詩篇16・5、23・5)であると同時に、苦しみや神の裁きをも意味していた(詩篇11・6、イザヤ51・17)。しばしば「杯に受くべきもの」という表現があるが、天においては神の決定が既になされていて、それを喜びにしろ、苦しみにしろ、神はそれらを与えようとしておられることを示す。マタイ20・22には、来るべき御苦しみと十字架をさして「わたしの飲もうとしている杯」という言葉が登場する

が、弟子たちはそれを理解しなかった。主は、明らかに来るべき受難と十字架を知っておられ、そのような苦い杯はできれば過ぎ去らせてくださいと願ったのであろう。わたしの思いのままではなく、みこころのままになさって下さい。この祈りこそが、まさにゲッセマネの祈りの中心である。み心の成就の祈りは「主の祈り」の中の第三の祈りである（マタイ6・9～13）。マタイによれば、天国に入ることがゆるされるのは、神の「みこころ」を行う人だけである（マタイ7・21）。更に、ヨハネによれば、イエス来臨の目的が神の「みこころ」を行うためであることを、イエスご自身、み心のうちにもっておられた（ヨハネ6・38～40）。マタイのこの祈りでは、キリストでさえご自身の思いの成ることをお求めにならず、神ご自身のみ心と完全に一致されることを求められたのである。

41 誘惑（ギリヤスモス） この個所では「誘惑」と訳しているが、この言葉は「試練」とも訳すことができる言葉である（ヤコブ1・2他）。試練も誘惑も、歩むべき道から人を引き離す危険をはらんだ苦しみである。悪魔はイエスを「誘惑」するが、み言葉に頼るイエスはそ

れを「試練」に変え、信仰を告白する機会としている（マタイ4・1～11）。誘惑を試練へと変える力はみ言葉と祈りである。だから「主の祈り」では、「誘惑」にあわせないようにと祈るのである。

42～43 この二回目の祈りの結論は「主の祈り」の言葉である。しかし、弟子たちはやはり眠りこけていた。イエスは弟子たちからも捨てられた。

45～46 主のゲッセマネでの孤独な祈りを通して、神のみ心へと進まれる主の決意が、今や不動のものとなった。ゲッセマネの祈りは、この結論へと導かれるまでにいかなる内的戦いが求められたかという事情を物語っている。「時」とは、神のみ心のなる「時」のことであり、これらのなりゆきのすべてを神ご自身が主宰しておられることを言外に語っているのである。そのみ心への服従の一点において、イエスの心は定まったのである。

参考図書 中澤啓介『マタイの福音書註解』（いのちのことば社）、A. T. Robertson 「Word Pictures in the New Testament」 (BROADMAN) 他

聖書

マタイ26・36〜46

タイトル

ゲツセマネの祈り

暗唱聖句

わたしの思いのままではなく、みこころのままになさって下さい。

マタイ26・39

目標

神の御心に従って十字架に進まれたキリストを覚え、信じ、従う者となる。

導入

(松浦みち子)

イエス様はよくお祈りをなさる方でした。ある時ひとりの弟子が「わたしたちにも祈ることを教えてください。」とお願ひした時、皆さんが教会学校でお祈りしている「主の祈り」を教えてくださいました。お祈りは神様とお話することですから、自分の気持ちを打ち明けたり、お願ひしたり、感謝したり何でもお話してよいのです。でも、今日のイエス様の祈りの様子はいつもと違います。いったい何が起きたのでしょうか。

悩めるイエス様の祈り

イエス様は弟子たちと一緒に、いつもお祈りするゲツセマネという園にいらつしやいました。園につくと「わ

たしが向こうへ行つて祈っている間、ここにすわっていなさい」と言われ、ペテロとヤコブとヨハネだけを連れてもつと奥深くに行かれました。祈りの場所に着いた時、今まで見たこともないとても悲しそうな悩みに満ちた顔で三人におつしやいました。「わたしは悲しみのあまり死ぬほどである。ここに待っていてわたしと一緒に目をさましていなさい」と。さらにご自分だけ少し離れた所にいつて、うつぶせになりお祈りを始められました。

「天のお父様、もしできることでしたら、どうか、この杯をわたしから過ぎ去らせてください」。これは、いったいどういう祈りなのでしょう。それは「天のお父様、できることなら十字架にからなくてもいいようにして下さい」というイエス様の心からの願ひでした。手足に釘を打ち付けられ、血を流して苦しむ十字架は、私たちと同じ体をもつておられたイエス様にとって想像するだけでも恐ろしいものでした。それ以上に、イエス様の十字架はすべての人の罪を背負って身代わりに神の怒りと罰を受けるためのものでしたから、いつも共に歩んでこられた天のお父様から引き裂かれ、見捨てられて死ぬということは、耐えられない苦しみでした。イエス様の悩み苦し

3月

18日 礼拝メッセージ例

みながらの祈りの様子を、医者ルカは、体から汗が血のしたたりのように落ちた（ルカ22・44）と記しています。どんなに苦しい祈りだったことでしょう。イエス様は神であられると同時に私たちと同じ体をもつ人間としての世に生まれてくださいました。ですから、できるなら苦しみから逃れたいという弱さをさらけだし祈られたのです。決してイエス様はスーパーマンのように何も臆することなく十字架に向かわれたのではないことを心に留めましょう。このような苦しみを経験された方であられるので、私たちの弱さや苦しみを知って心から同情して私たちの心に寄り添って下さることが出来るのですよ。

きつぱり心が定まった時

イエス様はご自分の苦しい気持ちをも、正直に打ち明けたあとで、こう祈られました。「しかし、わたしの思いのままにではなく、みこころのままになさって下さい」。きつぱりと、神様のみこころを受け入れる決断をなさいました。自分の願いを押し通すのではなく、神様のみこころのままに従います、という祈りです。心が定まった後、弟子たちの所に行って見ると、なんととも情けないこととにみな居眠りしています。しかし怒ることもなさらず

に「誘惑に陥らないように目をさまして祈っていなさい。心は熱しているが、肉体は弱いのである」と弟子たちをゆるし、励まされたのです。二度目にこう祈られました。「この杯を飲むほかに道がないのでしたら、どうか、みこころが行われますように」。イエス様は、ご自分の苦しみを正直に訴えつつ、神様のご計画を確かめ、そして何よりもみこころが実現するようにと祈られました。

祈りには人を変える力がある

祈りのうちにきつぱりと心を定め、立ち上がられたイエス様は、この後十字架にかけられるまでさまざまな苦しみの中を通られました。逃げようとしたり、泣き言をおっしゃることは一度もありませんでした。しっかりと前を見つめて、十字架の道へと進んで行かれました。祈りには、祈る人を変える力があります。また、目に見えない神様のお心を知ることが出来ます。それをよくご存知のイエス様は、神様にすがりついて頼り、お心がよくわかって喜んで従えるまで、祈り抜きました。

私たちも、イエス様のお祈りをお手本にして祈り、神様に喜ばれる者となりましょう。

♪じゅうじか♪（ふ14、ホ62）

聖書 マタイ27・45〜56 テーマ 十字架上のイエス

序論

(金井信生)

受難週の今日は、私たちの罪の姿と、キリストの救いがあらわされた十字架を学びます。

一、罪がむきだしになるという

イエスが十字架につけられたとき、地上の全面が暗くなりました。これは父なる神とイエスとの間が断たれたことのしるしです。また、神無き世界の暗さ、罪深さを示しています。

これまでの覚悟を忘れて逃げ去った弟子たち、証拠もないのにイエスに不利な証言を次々と重ねる人たち、イエスの無実を知りながら、十字架刑を許したローマの総督ピラト、皆自分の立場を守ることに精いっぱいでした。正義に目をつぶって、周りに流される方を選びました。

また、イエスを嘲^{あざわら}って、つばをかけたり、頬を打ったり、いばらの冠をかぶせた兵士たち、そして十字架につけられたイエスを見て、ののしり続けた人たち、それぞれ自分の勝手な期待を押し付けたり、弱いものを嘲って

自分が何者かであるかのようにふるまう者たちです。

イエスは、この人間の身勝手な振る舞いをご覧になり、心を傷つける言葉を聞かれました。そして沈黙を通されました。やがてイエスの口から出たのが、(どうしてわたしをお見捨てになったのですか)と天の父に叫ぶ言葉でした。エゴイズムの罪のために神に捨てられなければならない人間を代表しての叫びです。

二、神に祈るという

イエスの(わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか)の叫びは、本来は痛みや悲しみの中で失望し、落胆し、神様に救いを求めている私たちの叫びです。イエスは、私たちの身代りになるために、罪人と同じ立場に身を置き、私たちが神に見捨てられなければならないところを代わりに見捨てられてくださいました。そして神の義と愛が一つとなった十字架で叫ぶとき、この祈りは神のもとに届きました。

イエスが最後に大声で「父よ。わが霊を御手にゆだねます」と叫び、息を引き取られたとき、神殿の垂れ幕が上から下まで真二つに避けました。神殿の垂れ幕とは、神殿の至聖所に至る隔ての幕で、選ばれた大祭司だけが

一年に一度入る事が出来る幕です。最も聖なる神の臨在を表わす、至聖所への幕、神の臨在に触れるために血を携えなければ入る事のできない幕です。それが、十字架の上でキリストの血が流されきった時に、人の手ではなく、神様の手によって、上から下に真二つに裂けたのです。主イエスが贖いの使命を完了され、生ける神の臨在の前に罪ある人間が赦されて立つことのできる道が、この時に天より開かれたのです。

三、信仰が告白されるころ

十字架上の主イエスは惨めな姿のままです。十字架から降りることも、死から逃れることもありませんでした。天から声も助けもありませんでした。弱さと敗北の頂点としての死をイエスは迎えられました。しかし、百人隊長や、イエスの見張りをしていた人たち、つまり一連の出来事を最後まで見続けた人たちが、へまことに、この人は神の子であったと告白しました。彼らは、今まで自分たちが考えてきた救いとは違う、本当の救い、神からの救いを感じ、今まで当たり前と思い流されてきた自己中心の世界とはまったく違う世界があることを見たからです。

私たちはイエスのどの姿を見て、信仰を言い表すでしょうか。イエスの言葉や御業を通して、もちろん神の子救い主の姿を見ることが出来ます。日々の生活の中で、目に見える具体的な祝福を受けることも感謝であり、喜びです。しかし、絶望に捕らわれているときや、愛する者を失うときに、イエスの十字架を通し、他にはない神の救いを得ることが出来ます。

イエスは虐げられ、苦しみの中で何の抵抗もせずただ黙って十字架で殺されました。しかし、主イエスが息を引き取られたその時に、地震が起こり、墓が開きました。人間の希望が閉ざされるところが開かれて、絶望のどん底にも希望の光が大きく差し込んできます。

結論

イエスが私の罪の身代わりとなって十字架に死んでくださったことを信じ、感謝して受け入れましょう。神様の救いの御手にいつも守られて、希望のある幸いな生涯に進むことができます。

研究資料

(中島啓一)

テキストト

45 地上の全面が暗くなって 暗やみは出エジプトの災厄の一つであり(出エジプト10・22)、終わりの日に起こることとして、預言書に記されている(アモス8・9、イザヤ13・10等)。次節は、この暗黒がイエスと父なる神との断絶の表れであることを暗示している。満月である過ぎ越しの季節に日食は考えられない(日食が起こるのは新月の時のみ)。中東の局地風「カムシン」による砂ほこりが、太陽を遮ったのかもしれない。

46 エリ、エリ、レマ、サバクタニ 詩篇22篇の冒頭部分。「エリ」のみヘブル語(アラム語では「エロイ」で、

それ以外を当時の日常語であるアラム語。これは単なる詩篇の朗誦ではなく、まさにその時、イエスが経験していたことであった。肉体的激痛、精神的屈辱もさることながら、ゲツセマネの祈りにおいてイエスが何よりも恐れていた杯(26・39)は、この御父との断絶であった。しかしそれは、贖罪の成就のためには、どうしても飲み干されねばならない杯であったのである。

47 あれはエリヤを呼んでいるのだ ヘブル語の「エリ」がエリヤに聞こえたのだろう。当時のユダヤでは聖徒が助けを必要とするとき、エリヤが現れるという言い伝えがあった(11・14参照)。

48 酔いぶどう酒 ローマ兵が飲用した、ワイン酔を水で薄めた飲料であろう。マルコでは、エリヤが登場するかを見るために、兵が悪意をもって飲ませようとした印象を受けるが(マルコ15・36)、マタイではそういう印象は受けない。いずれにせよ「彼らは…わたしのかわいた時に酔を飲ませました」(詩篇69・21)という預言の成就である。ちなみに「没薬をませたぶどう酒」(マルコ15・23)は苦痛を緩和させるためのもので、別物である(イエスはそれを拒まれた)。

49 エリヤが彼を救いに来るかどうかな 興味本位もあるだろうが、人々は、イエスを(言い伝えにある)エリヤが助けに来るような義人と認めていたのであろう。

50 イエスはもう一度大声で叫んで、ついに息をひきとられた 口語訳は四福音書すべてでイエスの死の様子を「息をひきとられた」と訳しているが、原語では表現に差異がある。マルコ、ルカは文字通り「息をひきとった」

という意味であるが、ヨハネは「**ギ**」ブネウマ（息、霊の両方を指しうる）を委ねたと記す。マタイの場合は、マルコ・ルカとヨハネの中間あたりの表現と言えよう。**51〜53 神殿の幕が上から下まで真二つに裂けた** 至聖所の前に設けられた「第二の幕」（ヘブル9・3参照）。「裂けた」の動詞は受動態で、動作の主体が神であることを示している。至聖所は、年に一度、大祭司ただ一人が、自分と民の罪の贖い（あがな）のために入ることを許される所（ヘブル9・7）。その隔ての幕が裂けたことは、イエスの死によって、旧約の祭儀は終焉を迎え、新しい時代が始まったことを象徴している。今や、罪のための最上の犠牲がささげられた。「わたしたちはイエスの血によって、はばかることなく聖所にはいることができ、彼の肉体なる幕をとおり：はいって行くことができる」（ヘブル10・19〜20）。地震 マタイだけが、イエスの死の後に地震があったことを記している。眠っている多くの聖徒たちの死体が生き返った：イエスの復活ののち、墓から出てきて：多くの人に現れた 出来事の前後関係が難解だが、様々なことを考慮すると、ここで言われている地震は実際には、イエスのよみがえりの後（28・2と同じ地

震）のことかもしれない。聖徒たちの復活は、その時実際にあったのかもしれないが、やがて起こる聖徒のよみがえりの現実を象徴する表現として、ここに記されているのかもしれない。いずれにせよ、この記述がここに置かれていることは、聖徒のよみがえりが、イエスの十字架と復活に直接に依存するものであることを象徴している。イエスが死に、そして復活されたゆえに、彼を信じる者の復活もまた確かにされるのである。

54 まことに、この人は神の子であつた イエスの神性的性質と無実性、そしてローマ（ならびにユダヤ）の罪深さを認める告白であろう。この告白が異邦人によってなされたということは皮肉であると共に、救済史的な転換点（異邦人への救い）を指し示すものでもある。

55〜56 遠くの方から見てゐる女たち 最後まで主の苦しみを見届けたのは、女性たちであった。主に対してより大きな忠誠心を表した彼女たちが、数日後、主の復活という至上の喜びを最初に伝えるという光栄にあずかることになる。

参考図書 注解書 D. H. Hagner (Word), D. Hill (NCB), その他 The IVP Bible Background Commentary: NT

聖書

マタイ27・45〜56

タイトル

十字架上のイエス様

暗唱聖句

わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか。 マタイ27・46

目 標

身代わりの十字架の意味を知り、キリストを信じて救いを得る。

導入

(和田牧子)

教会の屋根の上には何があるかな。

そう、十字架ですね。礼拝堂の講壇の後ろにも十字架が架けられていますね。なぜキリスト教会にとつて、十字架が大切なのでしょう。クリスチャンは、十字架に不思議な力があると思つて拜んでいるわけではありません。十字架はもともと、非常に悪いことをした人が、その罰として受ける死刑の道具でした。

十字架への道

イエス様は、十二弟子のひとりであつたユダに裏切られ、銀貨三十枚で、祭司長や律法学者に売り飛ばされてしまいました。これらの人たちは、イエス様の活躍をねたみ、イエス様を憎んでいたのです。

群衆は、祭司長や長老たちにそそのかされ、ローマの総督であるピラトに叫びました。イエス様を「十字架につけよ」と。ピラトは、言いました。「あの人はいったいどんな悪いことをしたのか」。しかし、群衆がますます激しく叫び、今にも暴れて大騒ぎになりそうだったので、イエス様を十字架につけるために引き渡してしまつたのです。

イエス様はどんなお気持ちだったでしょう。イエス様は一言も反論することなく、十字架刑への道を進まれました。その間に、弟子たちは逃げていきました。イエス様は、人々からつばをかけられ、悪口を言われ、ののしられました。そして頭にとげのあるいばらの冠をかぶせられ、何度もむちで叩かれた後、両手両足を釘で打たれて、十字架につけられたのでした。私たちがこのような目にあつたらと想像してみてください。とても耐えられませんか。

神様との断絶

イエス様が十字架に架けられてから、お昼の十二時ごろ、突然太陽の光が陰り、あたり一面が真っ暗になってしまいました。不思議ですね。

それは、光である神様が全く見えなくなった、人間の心の暗闇を示すかのようでした。神様なんていないと拒んでいる人間の心は、真つ暗闇なのです。

午後三時ごろ、イエス様は大きな声で、「エリ、エリ、レマ、サバクタニ」と叫ばれました。これは「わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか」という意味です。

十字架につけられたイエス様は、身体じゅうが痛くて痛くて辛かったと思います。でもそれにもまして、父なる神さまから見捨てられ、その関係が断たれてしまったことが、悲しく辛いことなのでした。そして最期に、もう一度大声で叫んで、ついに息を引き取られたのです。

罪の罰とは、神様との関係が完全に断たれることです。「天のお父様」と親しくお呼びできない関係になってしまふのです。

罪の赦しと回復への道

どうして神様は、イエス様がこのような苦しみにあうままにされたのでしょうか。それは、私たちの罪の赦しのためでした。私たちの罪の身代わりに、イエス様が十字架の刑を受けて下さり、血を流して死んでくださった

のです。

イエス様が息を引き取られたその時、神殿の幕が上から下へと真二つに裂けました。また、グラグラと地震が起きました。イエス様の十字架上でのお姿を見、イエス様の番をしていたローマの百人隊長や兵士たちは、これらの不思議な出来事に驚き、恐れて、「まことに、この人は神の子であつた」と告白しました。また、イエス様を信じ仕えてきた女の人たちは、遠くのほうから、イエス様の十字架での様子を見守っていました。

まとめ

今日のお話には沢山の人たちが登場しましたね。祭司長や律法学者、ピラト、群衆…。でも、実は私たちを含めてみな同じ罪人なのです。

今日、イエス様の十字架が私の罪ためだったと信じてお祈りしましょう。「天のお父様。私の心には罪があります。私の罪の身代わりに、イエス様が十字架で死んでくださったことを信じます。イエス様、ごめんなさい。そして、ありがとうございます。」

♪ゆるすためです♪（イン25、ホ58）

牧羊ひろば



鈴蘭台福音教会 教会学校

●はじめに

この「牧羊ひろば」に執筆させて頂くのは前任地の阿南教会について二回目です。当時小学一年生の長女がCSの司会をしている写真をそこに載せましたが、今や大学一年となり当教会でCS教師をしています。子どもの十年はなんと早く過ぎることでしよう。

さて四年前に鈴蘭台福音教会に遣わされてきた時、CSの生徒は1、2名でした。どこの教会もCSは厳しい状況です。ところがその二週間後、イースターに突然ある一大家族（夫婦＋子ども4名）が当教会に導かれ、わが家の子どもも加わり、一挙10名のCS生徒が与えられ、CSが再スタートしました。また次の年には新たに一大家族が転入会され（夫婦＋子ども5名）、またたく間に教会堂に幼な子たちの明るい声が響きわたるようになりました。CS礼拝も小さな子ども

部屋を飛び出して礼拝堂に移り、プロジェクターを用いた礼拝が新たに始まったのです。

●現在のCSの紹介

CS教師5名、補助教師3名、毎週日曜日午前9時45分から10時20分（礼拝＆分級）、テキストはもちろん牧羊者！

●CSの年間行事

五月 母の日

お母さんたちにカーネーションをプレゼント。

六月 花の日訪問

駅、消防署、交番、老人ホームに花を届けます。



花の日訪問

七月 合同夏のワンデイキャンプ

押部谷教会、高和教会、鈴蘭台福音教会、そして今年から三木栄光教会が加わり、四教会合同キャンプに。二〇一五年から会場を当教会と押部谷教会と交互に開催（今年で三回目）。昨年

は押部谷教会にて流し
そうめん、プール、卓
球など楽しいプログラ
ム満載でした。今年は
修法が原にピクニック、ゲーム、夕食の後、恒例の花火！ 他教会の子どもたちとの聖書の学びや交わりは子どもたちにとっても良い刺激・感化を受ける時となっています。



四教会合同CSキャンプ



四教会合同CSキャンプ夕食

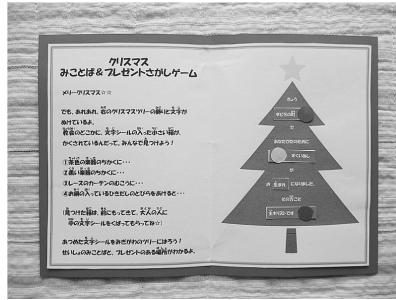
八月 教区ティーンズ・バイブルキャンプに参加
十月 ミニバザーに出店（スーパースポール釣り）
十一月 子ども祝福式



CSクリスマス

十二月 CSクリスマス

二〇一五年は西脇教会の津瀬兄妹をお招きし、腹話術と布芝居のクリスマス物語をして頂き、子どもたち大喜び！



みことば&プレゼント宝探し
ゲームカード

その他 子ども大会（春と秋）、子ども親睦会（随時）
*中学生以上の生徒はCSの後も大人の礼拝に出席しています。礼拝後二人のCS生徒（中二&高二）はずらん食堂を毎週手伝ってくれています。助さん、格さん？
いえいえ私の右腕、左腕として大活躍です。

●ブジョン

①感謝なことはここ数年の間に教会員の子どもさん、お孫さんが次々誕生され献児式の恵みにあずかられ（な

んと7人！）、教会の子どもたちが増えてきて教会の将来が非常に明るいこと。この子どもたちがしっかりCSにつながり、信仰継承がなされていくこと。

②囲いの外にいる羊たち（子どもたち）を見出し、CSに導くこと。

③将来、このCS生徒の中から一人でも多く献身者が起こされること！

●課題

子どもたちも人間関係で悩む時があります。ガキ大将あり、泣き虫あり、総じてわがままなり。当然子ども同士でトラブルること（けんか）は日常。しかし、一人一人神に導かれている子どもたちです。神に委ねられた子どもたちをしっかりとキリストの救いへとお導きしたい。それが私たちCS教師全員の切なる願いです。とにかく一人一人を大切に！です。

「罪人がひとりでも悔い改めるなら、悔改めを必要としない九十九人の正しい人のためにもまさる大きいよろこびが、天にあるであらう。」（ルカ15・7）

（宮崎友子）

おわりに

『牧羊者』二〇一七年度第Ⅳ巻をお届けできますことを感謝します。また、執筆者のご労苦に感謝いたします。

教師養成講座は川原崎晃師による「日本宣教の歴史(Ⅰ)」を、二〇〇七年度Ⅲ巻から再掲いたしました。「牧羊ひろば」は鈴蘭台福音教会のCSを紹介していただきました。

今号の執筆者、奉仕者を紹介いたします。

『牧羊者』のご購読・ご利用について

* 分級用に、ワークA(幼稚園向け)、B(主に小学生1~3年生向け)、C(主に小学生4~6年生向け)を用意しています。また、付録として「子ども聖書日課」、「フラッシュカード」、「み言葉カード」、「中高科へのヒント」があります。いずれも、下記ホームページから無料でダウンロードできます。送付ご希望の方には、ワークは各600円+税でお送りします。
信徒局 教会教育室 ホームページ
<http://cs.jccj.info/>

* ご注文は、日本イエス・キリスト教団(事務局)まで。申込み、部数変更等のための用紙も、上記ホームページからダウンロードできます。
神戸市兵庫区塚本通3-3-19
電話 (078) 575-5511
FAX (078) 575-6611

聖書講解

石田高保師 小泉創師 高橋頼男師

研究資料

金井信生師 福井文彦師 鎌野善三師

メッセージ例

宮澤清志師 中島啓一師 辻林和己師

ワーク(A)

松浦みち子師 飯田勝彦師 土屋開夫師

(B)

後藤 真師 和田牧子師 佐川直実師

(C)

山下大喜師 吉田美穂師 竹崎光則師

中高科へのヒント

勝田幸恵師 田中裕明師 勝田幸恵師

子ども聖書日課

上森恭子師 田中健一師 三輪正見師 石田高保師

み言葉カード

後藤栄子師 丹羽 遥姉 松浦あん姉 佐藤由香姉

イラスト

丹羽 遥姉 多田豊子師 加藤 清師 山田和幸師

ワーク打ち込み

長田栄一師 中島啓一師

また、事務作業・発送の教団事務所の兄姉、印刷の松木共栄印刷、菱三印刷に心から感謝いたします。(中島啓一)

聖書教育教案誌 牧羊者 二〇一七年度 Ⅳ巻

二〇一八年一月一日発行

発行所 日本イエス・キリスト教団 信託局 教会教育室
企画監修 日本イエス・キリスト教団 信託局 教会教育室

印刷所 菱三印刷株式会社
電話 (078) 575-5511
FAX (078) 575-5511
電話 (078) 575-5511

* 日本聖書協会『口語訳聖書』使用許諾済み